

# 人形使いと高校生

link

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

七色の人形使い、アリス・マーガトロイドが現代入りする話です。ほのぼのまったり、時にニヤニヤ。そんな話を目指しています。R-15は保険です。 ※パソコンがあまり使えないので更新が不定期になると思います、申し訳ございません。

# 目次

一日目	夕方	俺と彼女の出会い	
1			
一日目	夜	話し合いと撤退	9
一日目	深夜	これからよろしく	
17			
二日目	朝	魔法の話と逃走	27
二日目	夕方	魔法使いの弟子になった	
日			37
二日目	夜	アリスのパーフェクト魔法	
教室			44
三日目	夕方	魔女とお茶会	51
三日目	夜	彼女の意外な一面	56
四日目	朝	変わらないモノと変わるだ	
ろうモノ			66
四日目	夜	俺はノーマルだ!!	72
五日目	朝	上海人形の変化	80
五日目	夜	上海の変化の理由	88
六日目	朝	謎の夢と体の異常	98
六日目	昼	ひらがなで三文字	104
六日目	深夜	眠	
れない夜			113
七日目	前編	電車、人形、時々メロス	
123			
七日目	中編	月下美女	
133			



# 一日目 夕方 俺と彼女の出会い

いつも通りの日常。朝起きてご飯を食べ学校に行く。退屈な授業を聞き流し友人との多相のない話をし放課後には家に帰る。そんな退屈でぬるま湯に浸っているような日常を過ごしていた俺は自分の家であるマンションの外から自分の部屋の窓を凝視していた。

もちろん理由はある。俺は至って普通の男子高校生だ、自分の部屋の窓を見ながら妄想するような特殊な嗜好は持っていないのであしからず。それで俺が窓を凝視している訳だが理由は二つある。一つは俺の家の電気が点いていること、俺の両親は同じ会社に勤めている会社員で俺とは別の場所で住んでいるので家には居ない、たまに帰つてくるときがあるがそのときはきちんと連絡をする報、連、相ができる会社員だ。

二つ目は俺の寝室である部屋の窓、その窓の隅に小さな人形みたいな物がちよこんと腰掛けているのだ。俺に人形を集める趣味が無ければ自分の部屋に人形を置いたこともない。なのに小さな可愛らしい人形が窓越しに見えるのだ。

あそこに見覚えのない人形が置かれているという事は誰かが俺の部屋に入ったということだ。まあ、どっかの映画みたいに人形が凶器を持って独りで動くことがあるの

なら俺には人形に恨まれるような事をした覚えはないのでお引き取り願おう。しかしここは現実である、映画みたいなことにはなるはずが無いのでこの考えは捨てておこう。そうなると思えられることは一つ、俺の家に泥棒が入ったもしくは入っているという可能性だ。だがそうすると泥棒の意図がわからない。何故あんな場所に人形を置いているんだ？まさか見張り役なんて事はあるまい、見張りなら仲間かカメラでも置けばいいはずだ。なんで人形なんて置いてあるんだ？その理由をかれこれ十分程考えているが全くわからない。

というか他の人たちから見たら俺はどう映っているんだ？マンションの外から自分の部屋の窓を凝視している高校生、これじゃあまるで自分の部屋の窓を見て妄想している変態じゃないか。俺は普通の高校生だ、断じてそんな嗜好は無い。

「警察の者ですけど。先ほどこちらのマンションの住民の方から通報がありました。何でも怪しげな高校生が部屋を覗こうとしているとのことです。失礼ですがあなたは何をしているのですか？」

「なるほど、そっちなか」

そっちなかじゃねーよ俺!!何通報されちゃってんの？端から見て自分の部屋を見て妄想してるなんてわかる訳ねーだろ!!そりやそうなるよなあマンションを凝視している高校生なんて覗きをしているエロガキにしか映らないよな。警官がこっちを見てる何

か言い訳しないと。

「あーつとえーつとお、俺はこのマンションに住んでいる者で自分の部屋に見慣れない物が置いてあるのを見てどうしてそんなものが置いてあるのか考えていただけです」  
緊張のしすぎでかなりの早口になったが聞き取れたか？

「なるほど、ではあなたの家の住所が書かれています証明書はありますか？」

「証明書？えつと免許や資格は持ってないし生徒手帳は家に置いてある、管理人さんの所へ行くしかないのか？」

「えつと住所が書かれている物は持っていませんが、ここの管理人さんが俺の事を知っているのですの方が証明してくれると思います」

「では、その管理人の所へ案内してください」

「わかりました」

心を落ち着け警察の人を案内する。

管理人室に着き警察と管理人さんのやり取りを聞き流す。晚ご飯の献立が決まったところで話し合いが終わったようで警察の人は帰っていった。管理人さんに礼を言い、そのままエレベーターの中に入り五階のボタンを押す、動き出すときの浮遊感を体に感じ少しした後五階に着いた。ポケットから鍵を出しドアの鍵を開ける。警察の重圧から解放されたからか気分は軽く、エレベーターの中からずっとルパン三世のテーマを口

ずさんでいた。

二つある鍵穴を両方とも開け家の中に入る。そのときに毎回思うのはこのマンションのセキュリティの高さだ。玄関や各階の廊下、エレベーターの中にも監視カメラがあり、ドアには鍵穴が二つさらにドアチェーンはチタン製という徹底ぶり。俺の親が選んだマンションだが少し豪華すぎないか？仕送りとは別に家賃を貰っているけど正直高いと思つている。まあ、毎月お金は十分すぎるほどに貰っているし、たまに会いに来る両親を見る限り、無理してお金を稼いでいる様子は無いので文句はない。元々両親に無理を言つて一人暮らしをさせて貰っているので、文句を言おうものなら罰が中りそうだ。そんな事をつらつらと考えながら家に入り、靴を脱いで屈んだ所で俺の体は固まった。口ずさんでいた歌は丁度終わりの部分でルパンの名を二回呼ぶ所だった。

何がいけなかったのか。家の前であれこれ悩まずにさっさと警察に相談すればよかったのか、もしくは管理人さんと警察の人が話している横で晩ご飯の献立なんか考えずに部屋にある人形のことでも相談しておけばよかったのか、はたまたルパン三世のテーマを口ずさんだのがいけなかったのか。俺の目の前には見覚えのない靴が綺麗に揃えられていた。忘れていたよ、泥棒のこと。しかもセキュリティの高いこのマンションに侵入するとはルパンみたいだな。助けて銭形警部。

俺が現実逃避している間にも時間は進む。パタパタと廊下を歩く事が聞こえる。大



して大きくない音なのにイヤになるほど耳に響いた。俺は固まったまま動くことが出来ず、黙って何者かがこつちに近づいてくるのを待つしかなかった。脳内では様々な憶測が飛び交い消えていく、思考がだんだんと悪い方へと進み、それに連れ冷や汗が浮かび息が乱れる。

この場所から逃げようと後ろ手にドアノブを握ったところで廊下とりビングを仕切るドアが音を立てて開いた。

リビングにある窓から光が差し俺の目を焼く、泥棒の姿はぼんやりとしか見えずつだ分かることは泥棒が女性だということだ。

「あなたがこの住人？」

未だに姿がハッキリとしない女性が話しかけてきた。その声は透明感がありいつまでも聞いていたいと思える声だった。

しばらく経ちようやく眼が光に馴れたのか少女の姿がハッキリと映し出される。

少女は美しかった。西洋人形のような顔の造形や青いドレスを纏っているからか本の中から飛び出してきたかのような錯覚を覚える。幼く見える容姿は落ち着いた雰囲気と合わさってかわいいよりも綺麗といった言葉があてはまっていた。

息をするのを忘れ、ただただ少女の姿を眺める。眼球は限界まで見開かれ美しき少女を鮮明に記憶しようと躍起になる。全身に鳥肌が立ち目の前の少女に圧倒されていた。

「聞いてるの？あなたはこの家の住人よね？」

いつまでも固まったままの俺を不振に思ったのか若干眉を顰めて同じ質問をしてくる。

「お、おう。俺はこの部屋の住人だ」

どもりながらも質問に答えると少女は居住まいを正した。

「まずは勝手に家が上がったことを謝罪するわ」

そういつて頭を下げる少女に俺は黙っているしかなかった。ていうかこの子泥棒じゃないのか？

「それで私が何故あなたの家に居るのかだけど……あなたは这个世界とは別に他の世界があることを信じられるかしら？」

「……………」

この世界とは別の世界？何を言っているんだこの少女は

「まあ、いきなりこんな事を言っても信じられないでしょうけど本当なのよ。別の世界はこの世界で失われたもので溢れていて、その中に魔法があるの。私は魔法を操る魔法使いで私がこの世界に出ることになった原因も魔法にあるわ」

一息で言った彼女はこちらの反応を伺うようにじっと見つめてくる。

「魔法なんてあるはずがないだろ。それで、あんたは何が目的でこの家に忍び込んだん

だ？」

俺が否定の言葉を言うと目の前の少女は少し息を吐きひょいっと腕を振った。

「言葉だけでは信じれないみたいだから、証拠を見せるわ」

そう言った少女は後ろを振り返り飲み物を貰ってもいいかと聞いてきた。俺は反射的に頷き、直後目を見開いた。何故なら小さな二つの人形が扉を開けお茶とコップを持ってきたからである。人形達は少女と俺にそれぞれにコップを持たせお茶を注いでくる。

「……………」

「ありがとう」

馬鹿みたいに呆ける俺とは裏腹に少女はふわりと微笑んだ。かわいい。

「んっ……………くっ……………くっ……………ふう」

少女はコップを傾け中の液体を飲みこんでいく、陶磁器の様な白い色をした喉がお茶を燕下していく様に目が釘付けになっていた。正直に言おう人形が持ってきたお茶を飲む姿はとてエロかった。

「さてと、これで信じた？」

少女の言葉で我に帰り落ち着くためにお茶を飲む。一息吐くことで落ち着いた俺は今までの事を振り返り、詳しく話を聞く必要があると判断し少女を促した。

「なあ、詳しい話が聞きたい、リビングで話さないか？」  
それが俺と少女、アリス・マーガトロイドとの出会いだった。

## 一日目 夜 話し合いと撤退

俺と少女、アリス・マーガトロイドはこたつに向かい合って座っている。自己紹介は先ほど終え、今は俺が気になるところをマーガトロイドに質問する時間だ。一から十まで聞いたり答えたりするのは面倒くさいと双方の意見が合致したため、質問をする形式になった。

「マーガトロイド、お前は今すぐに元居た世界に帰れるか？」

「マーガトロイドじゃ長いからアリスでいいわ。それで、質問の答えは否ね」

名前で呼べだど？彼女居ない歴Ⅱ年齢の俺にはハードルが高すぎますよ。まあ、こんな美少女を名前呼びできる機会なんてこの先まず無いわけなので、がんばろうと思います。

俺の脳内で葛藤が繰り広げられている間、マーガトロイドは不思議そうな顔で俺の顔を見ていた。

「どうしたんだ？」

「あなたって変わってるのね。普通はさつき見せた魔法や、私の元居た世界について質問するものじゃない？」

それかあ、ぶっちゃけ今日は疲れたからその話は明日以降にしたいんだけどな。

「じゃあ、まず一つ、元居た世界に帰る当てはあるのか。二つ、帰る当てがない場合どうするのか。三つ元居た世界について。この位だな」

俺の質問を聞いたマーガトロイドは苦笑した。何故だ。

「やっぱりあなた、変わってるわ」

マーガトロイドの言葉に首を傾げる。変わってる？俺が？……………まあいいや、好くも悪くも周りの物事に関心が薄い俺だ、人と少し違っても気にする事でもないだろう。

「変わってるかどうかはどうでもいいから質問に答えてくれ」

「そうね、まず一番目の質問だけど、この世界で博麗神社という名前の神社を聞いたことがあるかしら？あるのならそこから私が元居た世界、幻想郷に帰れるわ」

「博麗神社か、聞いたことがないな。ちよつと待つてるパソコンで調べてみる」

勉強机に置いていたノートパソコンを持ってきて起動する。人工衛生を利用した地図検索サイトを開き、博麗神社と打ち込みしばらく待つ。

「それは何？」

作業が終わったのを見てマーガトロイドが話しかけてきた。パソコンを知らないのか？いったいどんな世界なんだ？幻想郷とやらは。

「これはパソコンと言う物で、簡単に言うと世界中から情報を集めることが出来る物だ。例えば料理のレシピを調べたいなら知りたい料理の名前を入れて検索すれば出てくる。こんな風に」

新しいタブを開き、「おいしい豚のしょうが焼き レシピ」と入力し、検索する。ちなみに、今日の晩ご飯はこれにするつもりだ。少し待ち何時もお世話になるサイトを開く。画面に様々なレシピが出てきたところでノートパソコンをくりりと反転、マーガトロイドに見えるようにする。

「へえ、便利なものね」

画面を見つめるマーガトロイドの眼が忙しく動く。金色の瞳は見ほれるほど綺麗で、ずっと見ていると吸い込まれそうになる。マーガトロイドと目を合わせづらい理由の一つだ。後の理由は、彼女の外見が綺麗すぎる事である。異性との接点が少ない俺には、目を見て話すのも小恥ずかしく感じる、その上名前呼びなど恥ずかしくて言えるわけがない。さつきから、彼女の名前を呼ばないように話してるのもそのためだ。それはそうとマーガトロイドは俺の名前を一言も言わないな、何か理由があるのか？

「ねえ、まだ下に文が続いているみたいだけど、それはどうやって見るのかしら」

「これを使う」

パソコンに繋がっているマウスを指で指しながら言う。マーガトロイドにマウスの

上に手を軽く乗せるよう指示し、説明を始める。

「その機械に手を包むように乗せたとき、中指の所にある出っ張ってる丸い物があるだろ。それを自分の方に回すと画面が下にスライドする、上に動かす場合は逆に回せばいい」

「このボタンみたいな物は何?」

中指でコロコロ（正式名称を知らないの俺はそう呼んでいる）。を動かし画面が動くのを確認すると次の質問をぶつけてくる。

クリックボタンか、言葉では説明するのが難しいな。

「なあ、言葉では説明しにくいからさ、実際にやってみようと思うんだが。そっち行ってもいいか?」

俺はマーガトロイドの隣を指で指し確認をとる。

「ええ、いいわよ」

軽く了承するマーガトロイドの隣に行き、何にもないような顔で座る。内心では大慌てだ。これまで女子の隣に座ることは何度か合ったが、これほど近くに座るのは初めてだ。しかもマーガトロイドは見たことも無いような美少女なので、なおさら緊張する。

だが、ここで照れるような真似はしない、意地があるんだ男には。

マーガトロイドの右隣に座り、マウスの使い方をレクチャーする。マーガトロイドは



理解力が高いようで、俺のたどたどしい説明でもすると理解してくるから助かっている。一通りの説明を終え、ついでのので検索のやり方も教えた。色々調べた事で世界の人形について調べたときは、少しずつパソコンの画面に近づくほど熱心に見ていた。おかげでマーガトロイドの金色の髪が目の前に広がり、甘い香りが俺の嗅覚を刺激し少し得をした気分になった。勿論、顔には出さずその後もパソコンの説明を続けた。

「そろそろ博麗神社の事を調べようか」

「そうね、パソコンが珍しくてつい夢中になったけれど、本来の目的は博麗神社の有無だったわね」

考えてみると博麗神社が無かったら、マーガトロイドは帰る当てが無くなるんだよね、どういう気分なんだろうか？ そう思つて横にいる少女の横顔を盗み見てもその表情から感情は読めない。タブを消す作業のスピードは落ちず、この先にあるはずの不安などが見あたらぬ。この少女は博麗神社がなかったらどうするつもりなのか、どうやって生きていくのだろうか？ 少し心配である。と、そこまで考えて俺は内心、愕然とした。いつから俺は会つてすぐの人を心配するようになったのか、周りへの関心が薄く、人に對して一歩退いた処から観察するように接するのが俺だった筈だ。それが出会つてすぐの得体の知れない自称「魔法使い」の言うことを信用し、心配をしているのか

……やめよう。これ以上詮無き事を考えても仕方ない、今は博麗神社の事を考えよう。

伏していた顔上げパソコンを見てみると、丁度地図以外のタブを消したところだった。随分と考え込んで居たように思えたがそんなことはなかったのか？

俺が時間の進み具合に首を傾げているとマーガトロイドが話しかけてきた。

「何か考え込んでいたようだけど大丈夫？話しかけても全然反応しないんだもの、少し心配したわ」

「大丈夫だ。……お前は平気なのか？」

「何の事？」

つい出してしまった問いかけにマーガトロイドは怪訝そうな顔をする。それが強がりでもない様なので思い切って聞くことにした。

「もし博麗神社が見つからなかったら、お前は帰れないんだぞ」

その声は発した俺が驚くほど心配性に溢れていた。

「……………」

マーガトロイドは目をまん丸に見開きこちらを見つめてくる。やがて花が開くかの様に微笑んだ。

それはとても柔らかく温かみのある笑顔だった。

間近で見るその笑顔に身惚れている俺に向けて少し嬉しそうな声色で話しかけてくる。

「ありがとう」

お礼を言われた俺は赤くなった顔をどうにかごまかそうと横を向いていた顔をパソコンへと向ける。

「ふふっ、意外と初なのね。さつきから恥ずかしがって名前を呼ばないし」

……………ばれてた。恥ずかしい、埋まりたい。

羞恥心に悶えてる俺にマーガトロイドは太陽みたいな笑顔を向けてくる。

やめてくれ、これ以上辱めないでくれ。

「最初は少し変わった人間だと思っただけけど、かわいい所もあるのね、あなた」

そう言って微笑ましいものを見るかの様な目を向けてくるマーガトロイドに腹が立った俺は仕返しする事にした。

咳払いで喉を整え、緊張感を解すために軽く息を吐く、準備が整った所で顔を横に向け声を出す。

「アリスはかわいいより綺麗と言った方が似合うよな」

「ありがとう、嬉しいわ」

俺、撃沈。間髪容れずに返された言葉と笑顔に、羞恥心が限界に達した俺は、台所へ

撤退することを選んだ。

「お茶、汲んでくる」

「ふふっ行ってらっしゃい」

俺は逃げ出した。

## 一日目 深夜 これからよろしく

台所で赤くなった顔を冷やし、どうにか落ち着けたところで部屋に戻った。ついでにお茶の入った容器も持っていく。

「あら、遅かったじゃない」

少し含みのある笑顔で話しかけてくる。返事を返さずにアリスの隣に座り、アリスのコップにもお茶を入れる。

「ありがとう」

お互いお茶を飲み、そこから無言が続く。俺は気恥ずかしさからしゃべることが出来ず、アリスの方は………分からない。横目で見ても整った顔立ちは無表情に近く、感情を読みとれない。目線はじつとパソコンの画面だけを見ていて、こっちには一瞥もくれない。

「ねえ」

少し心臓が跳ねた。横目で見ていたのがばれたのかと思いきやパソコンに視線を移すが、放置しすぎて明かりが消えたパソコンの画面に映っているアリスの顔はこっちを向いておらず、明かりが消えた画面から眼を放し手元のコップを覗いていた。

「さっき聞いてきた質問だけど、本当は少し不安だった」

その言葉を聞き、前に向けていた顔をアリスの方へ向ける。

少し意外だった。アリスは何時も落ち着いていて、常に余裕を持っている様な印象を持つていたからである。

アリスはコップを覗き込んだままで、ともすれば独り言と思える声量で話を続ける。

「こつちに来てから魔法の出力が落ちていて、幻想郷では何十体でも操れていた人形がほんの数体しか操れなかったの」

そう語る彼女の横顔はとても穏やかで、本当に不安に思っているのか疑問に残るほどだ。

「あなたが帰ってくるのを待つ間も、襲われたときや、人を呼ばれたときにすぐに対応できるように、ずっと考えていた。玄関であなたと会った時、後ろに武器を持った人形が居たの。知ってた？」

あまり感情を出さず、淡々と語っていた彼女の顔が少し歪んだ。その行為を後悔しているような顔だ。

「でも、今は大丈夫」

だが、後悔しているような顔もすぐに消えた。

今、その顔には柔らかな笑みが浮かんでいる。何気ない日常で、少し嬉しいことがあ

り、気分が良いときに浮かべる、何気ない笑顔だ。

「あなたと話して、あなたの人となりを知り、心配してもらった」

その言葉に俺の顔が一瞬にして真っ赤になる。アリスの顔を直視できなくなり下を向いた。

「知らなかったわ、誰かに心配して貰えるだけでこんなに安心できるだなんて」

「だから大丈夫、私は平気よ」

「ありがとう。心配してくれて嬉しかったわ」

ぐはっ。アリスさん、その言葉は反則ですよ。

恥ずかしさでどうにかなりそうだった俺は、こたつに顔を伏せた。木で出来た机は少し冷たく、顔の火照りを幾分かましにしてくれた。

「何だか私らしく無かったわね、忘れて頂戴」

忘れられる訳がないと思った。アリスの横顔を、言葉を、そこに込められた感情を、思出す度恥ずかしくなるが、それと同時に嬉しくもなる。何故、嬉しくなるのか分からないがそれを思い出せなくなるのは嫌だった。

むしろ俺の言葉忘れてほしいので、言ってみることにする。

「俺も俺らしくないことを言った、忘れてくれ」

「嫌よ、いつまでも覚えてるわ。嬉しかったんだもの、あなたの言葉」

再度、撃沈。上げていた顔が再びこたつに伏せられる。

俺が考えていた様な事を当たり前のように言葉にして伝えられる。そういう所で俺は彼女に勝てないと思った。

「またもや訪れる沈黙。俺は恥ずかしきで言葉を出せない。アリスはどうなのかと思いい、伏していた顔の向きを変えた。アリスはこちらを見てからかうような笑みを浮かべている。俺の反応を楽しんでいるようだ。少し不満が残る。拭いきれない敗北感を咳払いでごまかしつつ話しの修正を行う。」

「そろそろこれを見ようか」

マウスを小刻みに揺らし、消えていた画面に光を灯す。最小化した地図の上にカーソルを合わせ、横目でアリスを見る。頷くのを確認してから人差し指に力を込め、ボタンを押した。パソコンの画面が切り替わる、一瞬で地図が浮かび博麗神社が存在しない現実を突きつけてきた。

もう一度、横目でアリスを見てみる。アリスはこうなる事を分かっていたようにため息を付いた。

「これで私が幻想郷に帰れる宛が無くなったわ。後は私が居なくなつた事に誰かが気付くまで待たないといけないわ」

「そんなのすぐに気付くんじやないのか？」



疑問に思ったことをそのまま尋ねてみた。

「すぐには無理よ。私は幻想郷の様々な場所を訪れるし、交友関係も広くないもの」

「そうか。どのくらい掛かると思う？アリスの不在に誰かが気付くまで」

俺の質問にアリスはこちらに向けていた顔を下に向け、ぶつぶつと小声で呟きだした。

「私の活動範囲……………魔理沙……………次は霊夢……………博麗大結界は……………隙間は冬眠……………その式は……………人里……………人形劇……………」

お茶を飲みアリスの考えがまとまるまで時間を潰す。気になるフレーズが幾つか出てきたので後で聞くことにする。

考えがまとまったのかアリスが顔を上げた。

「早くて一週間、遅くて数ヶ月掛かるわ」

聞こえた言葉に耳を疑った。人が一人居なくなった事を気付くのに数ヶ月も掛かる世界なんて想像出来なかったのだ。

絶句している俺に構わずアリスはさらに話しを続ける。

「もし誰かが気付いたとしても、すぐに助けに来れるかは判らないわ」

「どういう事だ？」

「私が住んでいた世界には結界が張ってあって、この世界とは隔離されているの。その

結界は強力で私達が外の世界と呼んでいるこの世界と、幻想郷を行き来出来るのは八雲紫、結界を張った張本人だけ。私は幾つもの偶然が重なって結界を越えてしまったのだけど、そうでもない限り結界を越えるのは本当に難しいわ」

「じゃあその八雲紫って人に助けて貰えるんじゃないのか？」

アリスが話す内容に半ば啞然としつつ返事を返す。

「私が幻想郷から居なくなつた事に気づいた誰かが、紫に報告して私を連れ戻してくれるのが一番いいのだけ……」

何故かそこで言葉を濁したアリスは、ため息を吐き、何かを我慢するかのように頭を手を当てた。

「問題はね、季節なの」

季節？今は秋の終わり、つまり冬の始まりだ。それがどう関係するんだ？

「紫はね、この時期になると冬眠をするの」

「……………はあ？」

えっ、冬眠？冬眠って熊とかが冬になると始める、あの冬眠？そうアリスに聞くと「いいえ、本人が冬眠をしていると話してるだけだから、本当かどうかは判らないわ」と返ってきた。

「紫は冬眠を始めると、春まで姿が見えなくなるの。つまり本格的に冬が始まる前に、私

の不在を知って貰わないと春まで待たないといけなくなるわ」

そう語るアリスは少し不安気だった。

それはそうだろうと思う。いきなり見知らぬ土地に放り出され、救助は何時来るかわからない。そんな状態で冷静に物事を判断しているアリスはすごいと思った。

「はあ、どうしようかしら。一週間ぐらいなら、野宿でも何とかなるだろうけど、数ヶ月、それも冬の間となるとさすがに厳しいわね」

顔を伏せてこれからの事を考えるアリスに腹が立った。理由は分かっている、俺が当てにされてないからだ。俺とアリスが出会ってから、まだ一時間位しか経ってないってのも判っている。それでも、俺が頼りにされてないっていうのは腹が立つのだ。

だから言うことにした。自分の考えを素直に。

「行く当てがないんだよな？」

「ええ、つてまさか」

アリスは俺の考えていることを読んだのか、目をまん丸にして見つめてくる。宝石の様な青色の瞳に見つめられ、若干の照れを感じながら覚悟を決める。頭の片隅で、これじゃ今から告白するみたいじゃないかと考え、苦笑した。笑ったおかげで緊張が和らいだのか、自然体のまま口を開く。

「じゃあ此処に住めよ。部屋は余っているし、お金なら十分にある、もし、足りないなら

バイトでもすればいい。生活に必要な物は全て揃っている。野宿よりかは遥かにいいと思うが」

「……………ごめんなさい。あなたの事、少しは信用しているし、あなたが悪人だとは思えない。けれど、何か裏があるんじゃないかと思ってしまうわ。だから此処には住めない」

そんな事は分かっている。いくら何でも、出会ってすぐの人間を信用できないのは当たり前だ。だけどそれじゃ俺が納得しないし出来ない。なので少々、卑怯な手を使うことにした。

「俺が住んでいるこのマンション、セキュリティが売りらしくてな、至る所に監視カメラが付いている。それこそ怪しい人物が居たらすぐにわかる位に」

俺の言いたいことが分かったのか、アリスはため息を吐いた。

「強引な人ね」

「何とでも言え」

諦めた様な顔をしているアリスに対して胸を張る。アリスはため息を吐き、いつの間にか金色に変わっている瞳で、こちらを真っ直ぐに見つめてきた。

「二つ質問するわ。少しでも怪しいところがあれば、問答無用で出ていくから」  
「分かった」

真剣な雰囲気になったアリスにこちらも真面目に返す。

「私を此処に住まわせるのは、何か目的や下心があつての事ではないのね？」

「当たり前だ」

こちらを真つ直ぐに見つめる瞳に対して真つ直ぐに見つめ返す。ここで目を逸らしたら何もかもを失うと直感で分かつた。

数分が経ち、アリスの瞳が青色に変わる。どうやら警戒を解いてくれたようだ。

「分かつたわ、これからよろしく」

そう言つて手を差し出す彼女に、俺も体の力を抜き手を取つた。

「こちらこそよろしく」

アリスの手の感触に内心どぎまぎしつつ、平静を装い笑みを向けた。

「それじゃあ晩ご飯にするか。言つておくけど家は働かざる者食うべからずだからな、

家事とか手伝えよ」

「ええ、任せて頂戴」

「その後はアリスの話聞かせてくれよ」

「例えば？」

「アリスの住んでいた世界の事や魔法の事」

「いいわよ。その代わり、この世界のこと教えなさいよ」

「例えば？」

「そうね、電気の事とかかしら」

「電気を知らないのか、どんな世界なんだ？ 幻想郷って」

「ふふっ、これで研究が捗りそうね」

「さてと、今日の晩ご飯は……………」

「私は何をすれば……………」

こうして始まった俺とアリスの生活は、お互いを知ることから始めようと、夜遅くまで話し合うことから始まった。

## 二日目 朝 魔法の話と逃走

朝起きると西洋の騎士が持っているような、ランスのミニチュア版を持った小さな人形が、宙に浮かび俺をのぞき込んでいた。

「ひいぎやああああ!!」

宙に浮く人形を全力で払い退けようとし、当然のように避けられた俺はベッドから離脱。そのまま壁際にまで逃げ込み、側にあつたテレビのリモコンを構え必死に命乞いをした。

「マジすんません。マジすんません。小さい頃持っていたぬいぐるみのタンメン（クマ）は捨てたんじゃないんです、引越すするときにいつの間にか無くなっていて、新しい家で荷物の整理をしているときに気付いてどうしようもなかったんです。だから恨まないでください」

俺が必死の思いで言葉を連ねていると、何処かから笑い声が響いた。目を瞑っている俺は声の出所が分からず、かといって今、目を開けるのは怖すぎるのでどうしようもない。嗚呼、父さん、母さん、あなた達より先に逝ってしまうこと誠に申し訳なく思っております。来世では物を大切にし人形に恨まれる事無く、平穩無事に生を全うしたいと

思います。さようなら。

映画の被害者のような凄惨な死体になる未来を幻視した俺は全てを諦めた。だが、何時までも痛みを感じない事を疑問に思いおそるおそる目を開けた。部屋を見渡し、部屋の中央で笑っているアリスと、その傍らに浮かぶ人形を見て、昨夜聞いたアリスの魔法の内容を思いだし、ベットに戻り不貞寝した。

「本当にごめんなさい」

ローペコリ

そう謝っているのは、これから一緒に住むことになった少女、アリス・マーガトロイド。言葉をしゃべらず頭を下げるているのは、アリスの作った人形である上海。彼女ら（上海を含めていいのか分からないが）はリビングにあるテーブルに朝食を並べている。何でも驚かせてしまった事と、笑ってしまった事への御詫びらしい。

ただけなアリス、笑いながら謝られても怒りが増すだけだ。うまい事取り繕ってるみたいだけど、目元が笑っているんだよ。まあ、美少女の手料理が食べれるのなら文句は言わないが、料理中に思い出し笑いをするのはやめていただきたい。何故なら死にたく



なるから。

「はあ」

そんな心の愚痴をため息で追い出しつつ、料理をしているアリスの後ろ姿を見る。

……なんていうか絵になるよなあ。昨日とは違う青と白のエプロンドレス（幻想郷で服が汚れる事は日常茶飯事なので、常に着替えを何着か持っているらしい）はアリスの人形のような容姿と、染めたのでは絶対に出ない見事な色の金髪がよく映え、完成された絵のように思える。

その美少女の手料理を朝から食べる事ができる……考えたらテンション上がってきた。よし、さっきの事は水に流そう。

俺は結構、単純だったらしい。簡単に機嫌が直った俺は、朝食が出来るまでアリスの後ろ姿と、小さい体で一生懸命に働く上海を見て、時間を潰した。

「出来たわよ。初めて使う道具だったから、料理も簡単な物しか作らなかつたけど」

アリスが皿に盛りつけて料理を運んできた。作った料理はスクランブルエッグにベーコンとほうれん草の炒め物、それとバタートーストだ。

食欲を誘う匂いがリビングを満たし胃を刺激する。お腹がくうと小さく鳴り、唾液が溢れてくる。アリスがコップにお茶を注いでいるのがもどかしい、この家は食べるときに全員でいただきますと言ってから食べ始めるのが決まりなのだ。ちなみに、この家の

家訓というものは時々帰ってくる両親が決めたことだ。家訓はこれ以外にもあるが、それは後々話すとしよう。

考え事をしている間に準備が終わったようで、アリスが椅子を引き正面に座る。目を合わせ頷いたのを確認し、手を合わせる。

「いただきます」

と言つてすぐに食べ始める。まずはスクランブルエッグ、箸で摘み口にいれ租借する。ふむ、少し薄めの塩味だ。俺も味付けは同じだが出来具合がまるで違う、特に焼き加減がすばらしい。昨日、コンロや電化製品、食器や調理器具の場所、風呂の使い方まで教えたが、時間が無かったので必要最低限の事しか教えてない。それでこの焼き加減、料理ではアリスに勝てなさそうだ。

作られた料理を食べ終え、お茶を飲みながら一息吐く。

「お味はどうだった？」

「俺が作るより数段上手かった」

アリスの問いかけに間髪入れずに答えると、アリスは苦笑した。

「そう。それはよかったわ」

ちらりと時計を確認すると朝の七時だった。まだ時間があるので学校で食べる弁当を作ることにする。

フライパンにかき混ぜた卵を落とし、ある程度焼けたところで形を崩す。先ほどアリスの作ったスクランブルエッグを思い浮かべながら火を通す。

「まだ食べ足りないの？」

俺が台所に立ち料理を作り始めたのを見て、アリスと上海がやってきた。二段型の弁当箱を出し、一段目にご飯を詰めながら答える。

「今日、学校で食べる弁当を作ってる」

「そう。手伝いましょうか？」

俺が頷く前に冷蔵庫から食材を取って横で作り始める。

「たのむ」

ーークイクイ

もう作り始めているが、一応頼んでおく。そのまま二人で作り始めようとし、シャツが引かれるのを感じ振り向く。すると上海が小さな手で自分を指していた。

「えーつと、上海も手伝いたいのか？」

ーーククツククツ

勢いよく頷かれた。

「じゃあご飯にふりかけを掛けてくれ、ふりかけはあそこに置いてある」

ーービシツ

上海は敬礼をして飛んでいった。本当に人形なのか？

「そーいやアリス、今日はどうするんだ？俺は学校で夕方くらいまで帰れないぞ」

アリスに今日のことを聞いてみる。アリスのことは信用しているし、この家なら好きに使って貰ってもかまわないが、外に出るのは勘弁して欲しい。

「そうね、部屋の掃除をして本でも読んで時間を潰すわ」

「そうか、本は俺の部屋に幾つか置いてあるからそれを読むといい」

喋りながらも弁当は作っていたので、完成した弁当の蓋を閉め袋に詰めテーブルの上に置いておく。

そのまま洗面台まで歩いていき、歯磨きを始める。隣にはアリスが並んで歯ブラシを使っていた。

昨日の時点で生活用品の一式はアリスに渡してある、部屋は空き部屋に両親の部屋にある母親のベッドを持っていき、アリスが幻想郷にある自宅から持ってきた小物などを置いている。

昨夜は驚きの連続だった。アリスが持っていた鞆から、大量の人形や荷物、着替えなどが出てきた。全ての荷物を出し終えたアリスは、指の先から糸のようなものを出し、人形を五体ほど操っていた。アリスは不服そうな顔をし、やっぱり少ないわねと呟き自分も整頓に参加していた。ちなみに俺はアリスが欲しい物、例えば机やハンガーラック

などを、倉庫代わりのクローゼットから引っぱり出す作業をしていた。

歯磨きを終わうがいをする。鏡越しにアリスを見てみると、まだ歯を磨いているようだ。その後ろではアリスが持ってきた櫛を持った上海が、一生懸命アリスの髪を梳いていた。和む。

うがいし終わったコップを水で洗い、元の位置に戻す。洗面所を出て、そのまま自分の部屋に行き制服に着替える。鞆に教科書などを詰め込み、学校へ行く用意を終えた頃には時計の針は七と九を指していた。

「七時四十五分か、結構時間が余ったな。今日は歩きの気分だから、歩いていくとして、何時に出ようか」

俺の通っている学校は八時半までに正門をくぐらないと、遅刻書を書かないと教室に入れなくなる。成績には響かないが遅刻書が貯まると、校外の清掃活動に参加するはめになるので、なるべく遅刻はしないようにしている。まあ、家から歩いて十分、自転車で五分の所に高校が在るため、遅刻をしたことはないが。

「ねえ、お昼ご飯はどうすればいい?」

何時に家を出るか悩んでいると、リビングと廊下を隔てるドアを開けながらアリスが話しかけてきた。

「冷蔵庫にある食材、勝手に使ってもいいぞ」

「そう」

椅子に座ったアリスをブーツと見ていると、アリスは人形を動かし始めた。どうやら動作の確認をしているようだ。次第に人形の数が増えていき、五体目で動作が鈍り、六体目は動かなかつた。

「ふう、やっぱり五体が限界ね。外界はマナが少なすぎるわ」

滅茶苦茶気になるフレーズが出てきた。ファンタジーものでよく出る名前のような気がする。

「なあ、アリス。魔法ってさ誰にでも使えるの？」

「うーん、幻想郷では簡単に使えるけど、この世界じゃマナが少なすぎて素質がある人、魔力を持った人にしか使えないわ」

詳しく聞きたいが時間がないので、これだけ聞いておくことにする。

「俺は使える？」

「無理ね」

即答され少し落ち込む。使ってみたかったのになあ。

「仮にあなたが魔法を使うとするなら、何か代償を払わなければならない」

「代償？」

「簡単な魔法、火を出す魔法を使うなら、魔法陣を血で描くだけで発動するけど、ある程

度高度な魔法を使うときは、体の一部を代償に払わなければならないわ。例えば目に見えないものや実体の無いものを見る魔法を使うなら、片目を差し出さないと魔法は発動しない。だから、興味本意で魔法を使おうとしないこと、いいわね」

アリスは真剣な表情で俺を諭す。ここまで言われると魔法を使う気も無くすので素直に頷いておく。

「分かった」

話は終わったようで、アリスはこちらに合わせていた目線を外した。俺も視線を宙に巡らせ時計を確認する。ちょうどいい時間なので鞆に弁当を詰め、椅子から立ち上がる。

「ちよつと待ちなさい」

リビングの扉に手を掛け、開けようとした所でアリスから声が掛かった。

「椅子に座りなさい」

「何で？」

「いいから。上海、櫛を持ってきて頂戴」

強引に椅子につかされ肩に手を置かれる。

「あなたはいつも髪を整えないで行くの？」

「お、おう」

そのまま指で髪を梳かれ、体が硬直する。

「全く、あなたって人は。ああ、上海ご苦労様」

指の感触が無くなり、固い感触に変わる。少し残念に思ったことは秘密だ。

「はい、出来たわよ」

肩に置かれていた手が離れ、後ろに感じていたアリスの体温が離れる。恥ずかしさでいっぱいいっぱいな俺は、逃げるように玄関へと向かった。

「学校、行ってくる」

「ふふっ行ってらっしゃい」

ちくしよう、昨日もあつたぞこのやり取り。

俺は飛び出した。



## 二日目 夕方 魔法使いの弟子になった日

「あー暇だ」

授業中につい呟いてしまい、クラスメイトと担当教師の注目を集めてしまう。教師は文句を言いたそうな顔をし、結局黙ってしまった。

俺は学校の人達から怖がられている。理由は三つあり、一つは目だ。俺は目付きが悪いらしく、少し目を向けただけでも、睨まれたと誤解されることが多い。二つ目は、空手の黒帯を持っていただけでも、中学生の頃目付きのせいで、絡まれることが多かった俺は親に相談し空手を習い始めた。努力の末、黒帯を手にし大会でもいいところまで行った。だが、それでも絡まれた。最後には我慢の限界に達した俺が、絡んできた奴等を怪我させてしまい道場を破門、学校でも噂されるようになり逃げるようにこの町に引越した。だけどその事は関係なく、俺が黒帯を持っていた事がばれた事件があり、それが三つ目の理由だ。俺には友人が居た。そいつは入学して少し経った頃から、俺に話しかけるようになり次第にカラオケに行ったりして遊ぶ関係になった。俺はそいつの事を信じていたが、ある時そいつが俺に金目的で近づいてきたと分かり、またもや問題を起こしてしまった。当然、親に怒られ学校からも罰を受けた。その事が広まり、誰かが有

段者の大会に俺が出ていた事を噂として流したため、避けられるようになった。金目的で近づいてきた奴は引越し、俺もその時から人を信じきれなくなり、周囲に壁を作つて人と関係を持つことを諦めた。今では学校で話し掛けてくる人が居なくなり。担任とも事務的な会話しかしない。

だから不思議に思った。何でアリスのことは信じられたのだろうか。昨日から考えているが一向に答えは出ない。そうしている間にチャイムが鳴り、クラスメイト達が帰る準備を 시작했다。俺も鞆に教科書を詰め、担任が話し終え挨拶が終わるとすぐに教室を出た。

「ただいまー」

寄り道などせず、まっすぐ帰る。家が近いのですぐに着き、鍵を開けドアをくぐる。ちなみに、家から出入りするときには必ず挨拶をしないといけない、これも家訓だ。

廊下を歩き、まずは自分の部屋へ行く。鞆を置き服を着替え、空になった弁当箱を持ってリビングへ行く。

「今日の飯は何にしようか……な？」

冷蔵庫の中身を思い出しながらリビングのドアを開ける。そして目に飛び込んでき

た光景に言葉が尻すぼみになった。

ーイクイツクイツ、サツサツ、ヒヨイツ、クルリ

上海がテレビの前で机の上に乗って踊っていた。

聞こえてくる音楽から、夕方に放送している教育番組だと判るが、何故上海がそれを踊っているのか分からない。とりあえずお茶を入れ椅子に座る。

ーダツ

俺が座ると同時に上海が走り出した……俺の方に向かって。

「うおっ」

突然のことにびっくりした俺は、身を引こうとし椅子の背もたれに背中をぶつけた、しかも手に持ったままのコップが揺れ、中の液体がこぼれて俺のズボンを濡らした。

「はぁ」

少しやるせない気持ちになりため息を吐く。上海は机の上を駆け回っている、その様子を見ると怒るに怒れないのでより一層やるせないが募る。

「ごめんなさいね」

見兼ねたアリスが謝ってくる。それに苦笑と手を振る事で答え、台所まで行き弁当箱を洗う。横の乾燥棚には朝の食器と、アリスが昼に使ったと思われる食器が置かれていたので、食器棚に戻しておいた。

「ありがとう。それとちよつと来て頂戴」

お礼を言われた後、呼ばれたのでアリスの方へ行く。

「さつき濡れたところを見せて」

シャツを上げ見えやすいようにした。アリスは懐から千円札より一回り小さな紙を取り出した。それをズボンの濡れたところにかざし、指の先から出る糸で魔法陣を画く、直後その紙から暖かい風が吹き、ズボンを乾かした。

「なあ、その紙は何だ？」

俺の知る限りアリスは空中に先ほどの糸を使って魔法陣を画き魔法を使っていた。昨日も浮遊魔法という魔法を軽くて小さい物に掛けて運んでいた記憶がある。なのに紙を用意するという行程を入れたのには何か理由があるに違いない。そう思いアリスに聞いてみた。

「あら、目の付け所がいいじゃない。これは紙に私の魔力を馴染ませて、魔力を溜めれるようにした紙よ。これを使えば、ほとんど魔力を使わないですむわ」

何それほしい。

「外の世界はマナが少なくって、魔法を発動させるのに私の魔力を多く使わないといけない、だから大きな魔法は使えないわ。けど、これがあれば理論上は大魔術をこの世界で使えるようになる」

アリスの話の話を聞いてみると魔法について興味が湧いてきた。なので魔法の事を深く聞いてみることにした。

「なあアリス。魔法の事を初めから教えてくれないか？」

「あなたまだ魔法が使いたいのか？」

アリスは呆れたと言わんばかりに肩をすくめる。けどどな、アリス。それは検討違いだ。

「違う。俺が魔法の事を聞くのは、魔法というものに興味が湧いたからだ」

俺は興味が湧いたことには知識を深めないと我慢できない質で、こんな面白そうなもの放っておけるわけがない。

「過ぎた好奇心は身を滅ぼすわよ」

「アリスは面倒見がよさそうだからな、一回教えてくれたら最後まで付き合ってくれそうだ」

「まだ会って間もないのに、よくそんなことが言えるわね」

「アリスが優しくして面倒見がいいって事くらい、誰にでもすぐ分かる。」

「なっ」

アリスが驚いている間に畳み掛ける。

「勿論対価は用意する。アリスの研究に必要な物があれば俺が用意するし、研究に必要な

が無いものでもアリスがほしい物なら手に入れる。それでどうだ？」

「対価……………外の世界の技術……………」

悩んでくれてるみたいだ。さて、どうなることやら。

「はあ、まさかこの私が弟子を取る事になるとはね」

「そういうことは……………」

内心嬉しさがこみ上げるが、我慢する。

「いいわ、魔法のことを教えてあげる」

「ありがとうございます。師匠」

弟子という扱いになるみたいなので敬語を使う。まあアリスは嫌がるだろう。

「師匠はやめなさい。それと、敬語も禁止」

「わかった」

案の定嫌がったので、やめることにする。

「もうすぐご飯の時間だから、詳しい話は後ですわ。夕食が終わったら私の部屋に

て頂戴」

もうそんな時間なのかと思い時計を見ると、五時半だった。少し早くないか？何にす

るか決めてないし。

「今日はシチューを作しましょう。美味しそうなレシピがあったから、作ってみたいわ」

俺の部屋にあるレシピの本を思いだすと、親が帰ってきた時に作ってくれたシチューを思い出した。

「ああ、あれか。あれは美味しかったぞ」

「本当？それは楽しみね」

あれをアリスが作るとなると、よだれが湧いてくる。

「もう、作り始めるか。数時間煮込まないといけないから時間が掛かるしな」

「ええ、そうね」

料理の事、魔法の事、今からが楽しみで仕方ない。俺は逸る気持ちを抑え、台所へ向かった。

## 二日目 夜 アリスのパーフェクト魔法教室

シチューを食べ終えノートとシャーペンを持ちアリスの部屋へと赴く。待ちに待ったアリス先生の魔法教室の時間だ。

「アリス、入ってもいいか？」

アリスの部屋の前に立ちドアをノックする。中から入ってもいいとの返事が帰ってきたのでドアを開けて入った。

アリスの部屋は人形が所狭しと並んでいて、一見女の子らしい部屋といったような印象を受けるが、よく見ると部屋の中にある人形一つ一つが精巧であり、完成度も高いので人形の専門店に入ったかのような印象を受ける。

だが、アリスの部屋には二、三度入ったことがあるので、ある程度はこの雰囲気にもなれており、気後れするようなことはない。

「椅子と机を用意したから、そこに座って」

言われた通り座る。アリスは本棚からいくつかの分厚い本を取り出した。

「まずは基本を教えるわ。魔法を使うには魔力と理解が必要な、魔力は誰でも持っているけど量は少ないわ。たまに生まれながらにして魔力を多く持っている人もいるけ



ど……あなたは少な目ね」

少し落ち込む。

「理解は魔道書を読んだり、魔法使いに魔法の事を教えて貰ったりして、知識を深め理解する事よ」

さつきアリスが使った魔法陣をそのまま書いてもだめなのか。教わったことをそのままノートに書いておく。それと少し気になったので聞いてみる。

「アリスが今朝言っていたマナはどういう物なんだ？」

「そうね。一般的に魔法を発動するときは自分の魔力であるオドと、世界に備わっている魔力、マナを組み合わせて使うの。マナはオドと比べられないほど多く、マナを上手く運用する事で大規模な呪文を使えるようになるわ」

「なるほど、マナの少ないこの世界では大きな魔法が使えないのか」

アリスの説明は分かりやすく、俺みたいに事前知識が無くてもすんなりと理解する事が出来た。

「ええ、理解が早いよね」

「いや、アリスの説明が分かりやすいからだ」

お世辞抜きでアリスの話は分かりやすい。きっと教師に向いているだろう。メガネを掛けたアリス……ありだな。

「コホン、魔法は詠唱や術式を使って発動させるんだけど、私が使うのは魔法陣を使う魔法よ。魔法陣を使った魔法は回路を組み上げて、そこに魔力を通すことで発動する事が出来るの。魔法陣を使った魔法の利点は予め用意できたり、複数の魔法陣を掛け合わせで効果を増幅させたり、上海みたいに魔法陣を組み込んで自立行動を取らせたりと多様な性があるわ」

アリスの咳払いで意識を戻す。

「勿論欠点もあるわ。ある程度魔法のことに詳しい者に魔法陣を見られると次に何をやるのか見破られる事、それに魔法陣を組む時に邪魔されたりして形が崩れると全く別の魔法に変わってしまうこともあるわ。私が外の世界に出ることになった原因もこれよ」

「何があつたんだ？」

アリスが魔法陣の組上げをミスするとは考えられない。多分何かがあつて失敗したんだろう。

「私が転移の魔法を使おうとしたときに、天狗が通り過ぎていき、その時の風のせいで魔法陣の形が崩れたの。風が凄くてあまり見えなかつたけど、魔法陣の転移場所を描いていた所が崩れていたわ」

「そりゃ災難だったな」

「まだあるわよ。転移魔法を使おうとした場所が無縁塚で、昨日話したでしょ？紫の桜

が咲く場所のこと。そこからどこかに転移する時に結界が揺らいで、外の世界に出てしまったという訳。多分霊夢が紫を呼ぶために揺らしたのよ、今度会ったら文句言ってる」

「不運だな」

顔が引きつって上手く笑えない。笑ってもいいのかわからないが。

「そう？地面の中とか石の中に出る可能性も有ったわよ。そう考えるとここに出たのは、ある意味幸運だったかもしれないわ。外の世界には前から興味があったし」

「\*いしのなかにいる\*」

「何か言った？」

おおっと、危ない結構小さく呟いたのに。

「じゃあ話を戻すわね。一番やってはいけない事が魔法陣を間違えて書くことね。例えば魔法を発動させる向き、これを間違えて自分の方に発動させてしまうと………言わなくてもわかるわね？」

それは恥ずかしいな。自信満々に魔法を発動させる俺、そして吹っ飛ぶ、俺。死にたくなるな。

「魔法陣には一画二画に意味が込められていて、それを理解し、正しく組むことで魔法が発動するようになるわ」

今までの事をノートに書き写す。そこから自分なりの解釈を加えて纏める。こういった作業は好きなので、ペンがどんどん進む。

「つまり魔法陣を使う魔法は、魔法陣の中に組む記号の意味を理解し、それを正しく組み立てて、魔力を通す。この三つの工程を踏んで魔法を発動させる、わかった？」

「ああ。一つ疑問があるんだが、魔法陣に魔力を流す時に、流す量を多くしたらどうなるんだ？ 威力が強くなったりするの？」

「マナの量が少ないと魔法は発動しない。じゃあ逆はどうなんだ？」

「……………あなた、魔法使いに向いてるかも」

「俺が？」

俺って魔力が少ないんじゃないやなかったっけ。

「魔力自体は後から増やせるからあまり関係ないわ。私に向いてると思った理由は着眼点の良さよ。初めて聞くはずの法則を自分なりに解釈して考察を立てる、研究者の思考よ。魔法使いは総じて魔法というものを研究しているわ。あなたは目の付け所がいいし、あなたが魔法の事をもっと深く知れば面白い事になるかもしれないわね」

ベタ褒めだ。正直恥ずかしいので話題をそらそう。

「褒めてくれるのはありがたいんだが、俺の質問に答えてくれ」

「どうだ？ 俺の精一杯の照れ隠しは。うまくいったか？」

「照れなくてもいいのに」

筒抜けでした。何故わかったんだ？

「ふふっ秘密」

俺、声に出してねーよ!!

「顔に書いてるわよ。それで、魔力を多く注ぎとどうなるかだったかしら？ 限界量を超えれば魔法陣自体が破裂するわ。風船みたいなものよ、多すぎれば破裂するし少なすぎてもダメ。けど、限界ギリギリまで入れると威力が上がるわ。あなたの考えは的を得ているわ」

なるほど、疑問も解けたところで、時間も寝る時間だし。

「今日はここまでにしませうか」

ちらりと時計を見てアリスの方を向く。それだけでわかったようでアリスは授業の終わりを告げた。

「初心者用の魔道書を貸してあげるから読んでおきなさい」

アリスは授業が始まる前に用意していた本を差し出してくる。俺はそれを受け取りパラパラと捲った。

「……………英語、読めねーよ」

「辞書くらいあるでしょそれを使って読みなさい。これは宿題よ」

「アリス先生は結構スパルタだった。いきなりこれは難しすぎないか？  
頑張りなさい」

「項垂れる俺といい笑顔を浮かべるアリス。もういいや。」

「わかった、やってみる。お休み」

「ええ、おやすみ」

「二日目の夜はこうして更けていった。」

## 三日目 夕方 魔女とお茶会

「ただいまー」

玄関のドアを開け、いつもより少し大きめの声で帰宅を告げる。以前までは呟くような声で言っていた挨拶を、大きな声で告げるようになったのは、間違いなくこの家にアリスが住み始めた影響だろう。ただいまと言ったらおかえりと返ってくる、それだけで嬉しくなり自然と笑顔が浮かぶ。親と一緒に住んでいた時には当たり前だった事が、一人で生活をする様になって、当たり前じゃなくなり、心の何処かでは寂しいと感じていたんだろう。最近、自覚したことだ。

「おかえりなさい。あら？良い匂いがするわね」

自身の心境の変化を感じ取っていると、アリスが顔を出した。

「ケーキ、買ってきたから食べないか？」

今日は学校から帰ってくるときに、少し遠回りをして、新しくできたケーキ屋でケーキを買ってきた。種類はショート、チョコ、チーズ、モンブランの四つだ。四つ買ったのはアリスの好みに分からなかったのと、ただ単に美味しそうだったからだ。

「ありがとう。お茶は私が入れておくわ」

「アリスが手を差し出してきたので、ケーキの入った箱を渡す。

「ああ、冷蔵庫の隣にある食器棚の一番右下にいい紅茶があるから、それで入れてくれな  
いか？」

「わかったわ」

返事をしてアリスはリビングへ引き返していった。俺も自分の部屋に行き、着替え始め  
める。

そういえば上海を見てないな、いつもなら俺が帰って来たときに、アリスと一緒に  
迎えてくれるのに………まあいいか。普段、上海はこの家の中を自由に飛び回って  
る。比喻表現ではない。アリスには、上海と視覚を同期させるって最終手段があるし。

最近知ったことだが、アリスは人形と視界を共有出来るらしい。そして視界を共有し  
た人形によって、目の色が変わるらしい。人形にはそれぞれの役割があつて、その役割  
によつて魔力の色を変えているとのことだ。なので、いざとなつたらアリスが、上海の  
見ているものを見てそこから逆探知すればいい。

考え事をしていたら数分が経つた。急いで着替えリビングに向かう。俺は考え事を  
しだすと、周りが見えなくなるみたいで、今みたいに時間の事を忘れるときが多々ある。  
どうにかしてこの癖を直したいが、うまくいってない。

ドアを開けリビングに入ると強い紅茶の香りが部屋中を満たしていた。



「ちようど紅茶を淹れ終わったところよ。ケーキもすぐ用意するから待つて頂戴」

紅茶をカップに注いでいた陶器製のポツドを、テーブルの真ん中に置いたアリスが、台所にケーキを取りに行くのを椅子に座つて眺める。ふと、アリスの横を見ると上海がじいつとケーキの箱を物欲しそうな顔で見つめていた。本当に人形なのか？今度アリスに聞いてみよう。

「あなたはどれにするの？」

箱と食器を持ちテーブルまで来たアリスが、箱の中のケーキを見れるようにして聞いてきた。隣で二人分のフォークを持った上海が、急かすように両手をシャカシャカと動かしている。

「シヨートケーキで」

「なら、私はモンブランを貰つてもいいかしら？」

アリスが聞いてくるので頷くことで答える。ケーキと紅茶が楽しみで碌な反応を返せなかった。皿にのせたケーキを受け取りアリスが座るのを待つ。

アリスが座つたところで手を合わせた。

「いただきます」

ケーキを食べる前に紅茶を飲む。カップに顔を近づけると紅茶の香りがより強く感じ、その香りだけでふう、と美味しい食べ物を食べた時に出る、満足感を存分に含んだ

ため息が漏れた。香りを心ゆくまで楽しんだ後、紅茶を口に含む。

……………言葉に出来ないほど美味しかった。口に含んで、味と香りを楽しむ。これからはコンビニで売っている紅茶やティーパックで作る紅茶は飲めないだろう。

「茶葉の種類からストリートで入れたのだけどお口にあつたかしら？」

「滅茶苦茶うまい。今まで飲んだ紅茶の中で一番うまい」

アリスの問いかけに一にも二にもなく答える。

「そう。それはよかつたわ。ケーキも美味しいわよ」

そう言われ、ケーキがあつたことを今さらのように思い出す。紅茶の香りの良さと味に心奪われ、すっかり忘れていた。

ケーキを切り分け、一口食べる。これも十分に美味しい。しつこくないクリームの甘味や、酸味があり、それでいてクリームの味を邪魔しない、スポンジのあいだにあるイチゴの味など店で出すには十分すぎる、むしろ払った金額では足りないのじゃないかと思える味だ。

だが、それでもアリスの入れた紅茶の引き立て役でしかない。甘いケーキを食べたあとの紅茶は先ほどより苦く感じたが、その苦味ですら楽しめて飲める。

「そういうえば、この紅茶の葉は誰が買った物なの？あなたが淹れた所は見たことがないし」

「ああ、親父だよ。紅茶好きで普段からよく飲んでいたんだ」

まあ、あつちでも飲んでることだろう。

「ところで、あなたのケーキを一口貰ってもいいかしら？」

「んっ？いいぞ、紅茶を入れてくれたしな」

皿をアリスの方へ差し出す。アリスは自分のフォークでケーキを切り分け、お返しにとモンブランを差し出してきた。俺は少し考え栗を避けて切り分ける。……うん、うまい。これからもケーキはあそこで買おう。

「シヨートケーキも美味しいわね」

アリスが口に含んだフォークを見て思い至った。

あれ？今のつて間接キスじゃね？

その考えに至った瞬間、口の中に残っていた甘さが全て吹き飛んだ。その後は恥ずかしさからアリスの顔を見れず、紅茶の味を楽しむふりをしてごまかし続けた。

紅茶の味と香りは最後まで楽しめた。

## 三日目 夜 彼女の意外な一面

「ごちそうさま」

ケーキと紅茶を存分に堪能し、十分すぎる程の満足感を得てお茶会は終了した。安堵するような、紅茶をもつと楽しんでいたかったような、複雑な気持ちである。またあの紅茶を飲みたい、そう思った俺はアリスに頼むことにした。

「なあ、アリス」

「なに？」

そつけないような返し方だが、アリスと話すときはいつもこのような話し方なので、もう慣れたものだ。初めの頃は随分と気まずさを感じていた。喋りかけるがそつけない返事を返される、その度に黙る俺をどう思ったかは知らないが、アリスから謝られこれが自分の素の話し方なので、気にしないでいいと言われ、今では自然に話せるようになった。

「また今度ケーキを買ってくるから、紅茶を淹れてくれないか？」

「別にいいわよ。それにあなたが頼めば、いつでも淹れてあげるわよ」

その言葉に内心飛び上がる俺。

「けど」

「なんだ？」

「あなたの紅茶も飲んでみたいわ」

「俺は上手く淹れれないぞ」

親父に紅茶を上手に淹れるのには、幾つか手順を踏む必要があると聞かされていたが、その具体的な手順は全く知らない。

「別にいいわよ、たまには他の人が淹れた紅茶を、飲みたくなる時があるの。それに淹れ方なら教えてあげるわ」

「それならいいけど」

「じゃあ、また今度お茶をしましょう」

「ああ、よろしく。それと、食器は俺が洗っておくから」

「いいの？」

アリスが食器を手に立ち上がろうとするのを止め、持っている食器を奪い取る。そのまま台所に進む俺の背後から、聞こえたアリスの疑問に片手を上げる事で答え食器を洗い始める。

「じゃあ私は部屋に戻るわね」

「おう」

リビングのドアが閉まる音がし、水の音だけが響き渡る。静かな空間で黙々と食器を洗い、わずか数分で洗い終わった。

「ふう、俺も部屋に戻るか」

タオルで濡れた手を拭き、自分の部屋に戻る。する事も無いので昨日、宿題として出された魔道書を辞書を片手に読み進める。魔法の勉強は面白く、最初乗り気ではなかった英語の解読も、今では楽しみながら読み進めることができています。

「ふう、流石に疲れるな」

ただ慣れない作業なので、集中力が続かない。四十分ほどで集中力が途切れるので、そこからは別の事をするようにしている。今日はこの前買った、映画を見ることにする。

俺の部屋にはテレビがあり、その下のテレビ台の中には、俺が買って溜めている映画がいくつもある。その中のアクション映画を見ることにした。

「確か奥の方にあったよな」

——カタン

俺がテレビ台の引き出しに手を掛けると、中から小さなもの音が聞こえた。

「……………」

恐怖のあまり声を失う俺。実は怖いものが苦手な俺は、この中にあるものを封印して

いた。その正体は親が誕生日に買ってきてくれた映画だ。内容は曖昧だがその映画が滅茶苦茶怖かった事を覚えている。確かその映画を見た後は、一週間ほど怖くて眠れず、倒れたことがある。その時から捨てよう捨てようと思うが、捨てたら呪われそうなので、捨てる事が出来ないでいるのが現状だ。

震える足で少しづつ後退していく。ジリジリと肌を焦がすような緊張感に包まれながら、ドアの下までたどり着いた。瞬間

ーコンコン

「入ってもいいかしら?」

ダツ!! ドゴンツツ!!! 「痛ってえ!!!」

即座に右斜め前方に転がりベッドに激突した。

「大丈夫? なにかすごい音がしたのだけど……」

体制と服を整え、ずれたベッドの位置を直す。これである程度の体裁を保てると思うので、入ってきて貰う事にする。

「大丈夫だ。問題ない」

それにしてもアリスはなんの用があつて、俺の部屋に来たのだろうか?

「入るわよ、ねえ此処に上h」

ーガタンっ

先ほどの音より少し大きな音が響く。

忘れてた。この部屋には今幽霊がいることを。

「気を付けろアリス!!あの引き出しの中に何かいるぞ!!!」

アリスを後ろに庇い声を張り上げる。

「……………」

「……………」

静まり返る室内。その不気味な静寂を破る音は、俺の後ろから聞こえてきた。

「プツ……フツツ……フツ……んう……………プツ……フツツ」

アリスの必死に押し殺そうとして、盛大に失敗している笑い声を聞き俺はあつげにとられた。

「ちよつ…………と、フツツ……………待つて…………フツツ、頂戴」

それから数分間アリスは笑っていた。緊張感やら恐怖心やらが全部吹き飛んだ俺が、リビングから持ってきたお茶を飲むことで、ようやく笑いが収まったアリスがこちらを向く。

「……………フツツ」

「もういいよ!!!」



「ごめんなさい。少し笑いすぎたわ」

あれで少し？

「まあ、いい。それでなんの用があつてアリスは俺の部屋に来たんだ？」

頭の中では検討がついているが一応聞いてみる。

「ええ、上海を連れ戻しに」

やっぱりか。冷静になつて考えてみると、それしか可能性がない。魔法講座かとも思ったが、朝に魔道書の進行具合を聞かれたときに、まだ読んでないと答えたから除外、残るはお茶会の途中から姿が見えなかった上海の事だろうと予想はつく。

「なんでこんなところに入っているんだよ？」

引き出しを開け上海を引っ張り出す。上海は俺の手から離れ、アリスの腕にくつついた。

「ちよつと待つて、今から上海が見たものを読み取るから。……説明するわね。上海はあなたの部屋のテレビ台の、真ん前に浮かんでいたわ。何を思ったのか、上海は引き出しを開けてその中に入り込むと、下に敷かれていたズタズタになった死体の絵を見て、慌てて奥に飛んで逃げだしたわ」

「それで引き出しの奥の壁にぶつかつて閉じ込められたのか。ていうか上海はそんなこ

とができるのか?」

ちらりと上海を見ると、エヘンと胸を張っていた。

「当たり前よ。この子は特別なの」

心なしかアリスも誇らしげだ。

ーークイクイッ

腕を惹かれたのでそちらを見る。いつの間にか横に来ていた上海が、引き出しの中を指している。

「何か見たいのか?」

ーークククク

「どれが見たいんだ?」

聞いてから後悔した。好奇心旺盛で、本当に人形かどうかとも疑わしい上海が選ぶものなんて限られている。ああ見ろ、やっぱりあの映画だ。

「本当に見るのか?」

ーークククク

ちくしょう。

晩御飯を食べ終えてお風呂に入り、アリスがお風呂から出て来た頃に、その時間はやって来た。アリスがいる手前、怖いからなどという理由で断れない俺は、せめてアリスの怖がる様子を堪能しようという、なんともトチ狂った考えのもと、部屋の電気を消した万全の状態で、映画のディスクをプレイヤーにセットしていた。

今は後悔している。怖いめちやくちや怖い。今すぐにも気絶したい。気を紛らわせるために周りを見てみると、上海がアリスの腕にくつつき小刻みに揺れていた。それを見て少し緊張が紛れた。

アリスはどうなのかと思い見てみた。すると、なんとも落ち着き払っていた。画面の中で小さな女の子の霊が登場する度、ビクツと体を跳ね上げる俺と上海とは対照的に、女の子の霊についてよくわからない考察を立てている。よくわからないが悔しい。

そんなこんなで映画も終盤に差し掛かった頃。上海が俺とアリスを手招きで呼び寄せた。なんだ？と思いつつ近くに寄った俺とアリスの間に上海が座り込み、小さな両手で俺とアリスの腕を取った。

なんとなくアリスの方へ顔を向け、アリスも見ていたので、苦笑し合う。

——仕方ない子だな。

——ええ、本当にそうね。

などと聞こえてきそうな、ほんわかとした雰囲気だった。

だが、それも長く続かない。物語の終盤とはつまりクライマックスだ。古今東西、どの映画でもクライマックスは盛り上がるものである。それがたとえ悲鳴と絶叫が響き渡り、死肉が踊るホラー映画でも。

先ほどのほんわかした空気も消え失せ。阿鼻叫喚の地獄絵図になっている画面の中とは対照的に、リビングは静寂に包まれている。隣からも息を呑む音が聞こえてきた。どうやらさすがのアリスも緊張しているみたいだ。だが、俺は余裕である。なぜなら思い出したからだ。このあとの展開や、少女の霊がどうなるのかも、この映画は最後には救われるストーリーだったはずだ。ハッピーエンドで終わると分かっている、ホラー映画などもう怖くない。

だから、テレビから響き渡る悲鳴に驚いたアリスが、膝の上に置いてある俺の手を握ってきたときも、ニヤニヤとした顔で優越感に浸っていた。いつもの俺なら慌てふためく所だが、余裕を持っている俺には効果がなかった。

映画が終わり、少女の悪霊は成仏した。今はエンドロールが流れている。

「結構怖かったな？」

俺の手の上に乗せられたアリスの手を見て、ニヤニヤしながら話しかける。それを見てアリスの顔は一瞬で紅色に染まった。

「ちっ!! 違うのよ!!! これはえーとっ、とっとにかく違うんだから!!!」

「わかったわかった」

ニヤニヤしながら適当に返事を返す。

「もうっ!! 私は寝るわ!! 行くわよ上海」

勝った。

少し大きめの足音を立てて去っていくアリスを最後まで見終えてから。ディスクを出そうとテレビに近づきしやがみこんだ。

『ユルサナインダカラ』

「えっ?」

耳元でついさつき聞いた少女の声が聞こえた。顔を上げると顔中に血を付けた少女の顔が俺の視界を埋め尽くしていた。画面に映っていた幸せになったはずの家族の姿は何処にも無くなっている。

そのあとの記憶は無い。ただ、気がついたら朝になっていた。

## 四日目 朝 変わらないモノと変わるだろうモノ

ゆさゆさと体を揺らされる感覚を感じ、俺は目を覚ました。最初に目に入ったのは、蛍光灯の光に照らされて輝く金色の髪と、透き通った青色の宝石のような瞳だった。

「おはよう、アリス」

「ええ、おはよう」

何故か凝り固まっている体に入力して起こし周りを見渡す。そこは見慣れた家具が置かれているリビングだった。どうやら俺はリビングにあるテレビの前で、床に寝転がって眠っていたらしい。

「俺は何でリビングで寝てたんだ？」

「知らないわよ。それより顔を洗ってきなさい、ご飯は作っておくわ」

礼を言いリビングを出る。手荒い場に着き歯ブラシを取り、歯磨きをしながら自分の部屋に戻り、学校の用意をする。その間もずっと昨日起きた出来事を思い返していた。

俺は昨日のことを何処まで覚えている？アリスと紅茶を飲んだのは覚えている、そして上海が俺の部屋にいてアリスが来た。ていうかアリスは、何で俺の部屋に上海が居るって分かったんだ？視界を同期させてる訳でも無かったみたいだし………後で聞

こう。今大事なのは、何故俺がリビングで寝ていたかだ。その後ホラー映画を見ていて、最後の方に何か恐ろしいものを見たような……………世の中には知らない方がいい事もある、これはその部類だ。ぶるぶると体を謎の悪寒に震わせながら、昨日の出来事を振り返るのをやめる。

「昨日のアリスは可愛かったなあ」

照れたアリス、それだけを覚えておけばいいや。結局はそう完結し、深まる思考にピリオドを打つ。凧のように飛んでいきそうな思考を手繰り寄せ、意識を戻してみるといつの間にか歯磨きを終わらせ、学校の用意が入った鞆を持ってリビングにつつ立っていた。

「あら、ありがとう。ご飯、出来ているわよ」

テーブルに朝ご飯のサンドウィッチを並べながら、アリスがお礼を言ってくる。正直、何に対してのお礼か分からない。何となく藪蛇つばいなので聞かなくてもいい気がするが、もやもやしたものを抱えたくないのです、聞いてみることにする。

「なあアリス、今何に対して礼を言ったんだ？」

「今、あなたが……………いえ、何でもないわ」

素直に聞いてみるとはぐらかされた。もやもや感が一層強まった。アリスを見てみるも、こちらから完全に意識を外しているみたいだ。こうなると何を聞いても無駄な事

をこの短い生活の中で理解しているため、聞くことを諦める。小さくまあいいや、と呟いてもやもやしたものを断ち切り席に着いた。

「いただきます」

上海が持つてきてくれたコップを受け取り、一旦テーブルに置く。もはや恒例になった挨拶を済ませ、朝食を取り始めた。

これといった会話はなく食事を食べ終えた。

朝食をアリスが作り、洗い物を俺が担当する。アリスは人形の調整をし、洗い物が終わった俺はその作業を眺める。二人共喋らずテレビの音しか聞こえない、だがそこに居心地の悪さはなく、ただただ安らげる空間が広がっている。アリスが来てから毎日訪れる時間だ。アリスは人形の調整を終えると、人形を使った短い劇を始める。それがまた上手く、つい時間を忘れるほど見入ってしまう。それを見終えると学校の時間にちやうどいいので、家を出る。それが毎日の流れになっていた。いつかアリスがいなくなったら、俺の日常がどうなるのか分からない。ただ、毎日が色褪せて見えるようになって思う。そんなことにはなつてほしくないな、なんて考えていたら、目の前に紅茶が置かれた。

「どうしたの？浮かない顔をして」

紅茶の入ったカップを持ち、少し口に含む。沈んだ気分で味わう紅茶は、相変わらず



おいしくて少し笑ってしまった。

「おいしいな、本当に」

呟いてまた一口。

やっぱり笑ってしまふ。

「本当にどうしたの？」

言われて、アリスに返事をしていなかった事を思い出す。

「ああ、ちよと考え事をしてただけだ」

「そう？それにしては悲しそうな顔をしてたわよ」

「そうか？」

顔に手を当ててみる。勿論感触だけでは分からず、すぐに手を離れた。

「ん？」

ふと、頭に小さなものが当てられるのを感じ、目線を上にあげてみた。

そこには上海がフヨフヨと浮き、俺の頭を撫でている。その姿は、人形の姿と相まつてより愛らしく見えた。

「ははっありがとう上海、お陰で元気が出たよ」

どういたしましてと言わんばかりに両手を上げる上海の頭を人差し指で撫で、紅茶を飲み干す。

「アリスもありがとうな、お陰で元氣出た」

「どういたしまして」

カップを手を持ちながらアリスが返事を返す。時計を見ると、学校にギリギリ間に合つかという所だった。だが、そんな事はお構いなしに話を続ける。

「アリス」

「何？」

「帰つてきたらさ、紅茶の入れ方を教えてくれないか？」

自然と笑顔が浮かんでいるのが分かる。

「別にいいわよ。それより学校とやらはいいの？」

了承の返事、それだけで今日の夕方が楽しみになった。

「別にいいんだよ、たまには」

遅刻なんてアリス達と過ごすひと時に比べれば、安いものである。時計を見ると遅刻することが確定していた。こうなるともう開き直るしかない。いや、だいぶ前から開き直っているが今では休んでしまおうかな、なんて考えが浮かんでいる。

「だめよ、ちゃんと行きなさい」

呆れたように言われた。

「何で分かつたんだ？」

聞いてみるが答えは帰ってこない。それどころか無言で俺の顔を見てくる……何故か上海まで。数分ほど目を合わせていたが、ついには根負けをして目をそらした。

「わかったわかった、行けばいいんだろ」

少し不貞腐れた仕草でカバンを持つ。我ながら子供っぽいな、なんて考えながら玄関まで移動した。靴を履きドアを開けながら振り向いて声を出す。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

ーフリフリ

玄関にまで来たアリスと上海に手を振られ、見送られる。それだけで簡単に機嫌が好くなり、足取りも軽くなった。

「今日は歩いて行くか」

余裕を持った笑みで歩き出す。先ほど感じた寂しさはどこにもなく、これからの日々喜びと幸せが満ちているのを想像し、期待に胸を膨らませている。

残された時間は分からないが、それまでの時間を精一杯過ごそうと思った。

## 四日目 夜 俺はノーマルだ!!

ふと、いつかのようにマンシヨンの前から、自分の住んでいる部屋を見上げると、こちらをジッと見つめる、小さな人形と目があつた。

——ブンブン

「……………」

目が合い嬉しそうに手を振り回す上海とは裏腹に、俺は固まった。驚きのあまり声をせず、口をパクパクと酸素を求める金魚のように動かす事しか出来ない。視覚から入った情報を受け入れる事が出来ず、フリーズしようとしている脳をなんとか動かし、現状を把握することに努める。長年放置されたロボットが、錆び付いた首から音を立てながら動かすような動きで周りを見渡す。幸いなことに周囲に人は見当たらず、今も首をかしげながら、全力で手を振る小さな人形という怪奇現象を目撃した人はいないようだ。

一先ず安堵の息を吐く。もしもこの光景を見られていたら、誤魔化すのは大変だっただろう。

何時までこの幸運が続くかわからないので、上海には早く引っ込んでもらおう。もう

一度周囲に人が居ないのを確認してから、上海に向けて犬を追い払うように手を振った。

——ブツブツ

どうやら俺のハンドシグナルは通じなかったようだ。手を振り返してもらえたのが嬉しかったらしく、先ほどよりも力強く手を振っている。小さな体を目一杯動かし、ピョンツピョンツと飛び跳ねながら手を振る姿は可愛らしく、自分の置かれている状況を少しの間とはいえ忘れてしまうほどだった。

何をやっても通じなさそうなので、上に上がることにする。ドアを潜る前にもう一度だけ上海に手を振り、反応を見る前にマンシヨンの中に入った。

エレベーターに乗り込み五階のボタンを押す、動き出したエレベーターの浮遊感を感じながら、カバンから鍵を取り出した。少ししてからエレベーターが止まる、扉が開くのと同時に外に出て、そのまま左端にある自分の部屋の前へ行き、そのまま出しておいた鍵を鍵穴に差し込み回すと、ガチャツと音を起て鍵が開いた。

もう片方の鍵を開き、ドアを開け声を出す。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

——フリフリ

間髪いれずに返って来た声に上海が報せたんだなど、確信を持った。

俺の帰りを待つて居てくれたのは嬉しいが、少し上を見上げれば見える窓のそばで動いたことは怒らなければならぬ。何しろその姿を見られたら非常に困る。一度見られたら色々な事が終わってしまうのだ。見られたのが一人だけならば、まだ誤魔化せるがそれが二人、三人と増えるともう誤魔化せない。噂が噂を呼び、人が集まる。ここら辺の人はそういう話に敏感なので、見つかるのも時間の問題だ。その後の事はどうなるが判らないが、この心地のいい日常は失われてしまうだろう。それは嫌だ。例え何時か別れる日が来るだろうが、他人の手で無理矢理引き剥がされるなんてことは許せない。そうなりたくないのです、ここは心を鬼にして上海を叱りつける。

リビングに移動し椅子に座った。いつもならすぐに自分の部屋に行き、着替えてから出てくるのだが今日は制服のまま座る。そんな俺の行動を疑問に思ったのか、アリスと上海はどこにも行かずリビングに残った。

「なあ上海、俺が帰ってくるのを、待つていてくれることは嬉しいんだけどな、外から見える場所で動くのはやめてほしい。上海が一人で動いてる所を見られたら大変なことになるんだ」

—— シュンツ

俺の言葉を聞き、項垂れる上海の姿に罪悪感が湧き上がってくるが、それを無視して

続く言葉を発しようとした所で、俺の口を遮るように突き出されたアリスの手によって、妨げられた。

「ごめんなさい、あなたに言っただけじゃなかったわね」

俺は首をかしげた。何のことだ？

「上海と私にはある程度認識を阻害する魔法が掛けられているの」

「認識を……阻害？」

そうなるかとアリスと上海は、人に見られても大丈夫なのか？

「ええ、この魔法を掛けている間は人に見られても、認識されにくくなるし、記憶にも残りづらくなるの。だからたとえ見られても数分後には忘れてしまうわ」

じゃあアリスは外に出れるんじゃないのか？今までは近所の人たちの目に映ると困るから外に出せなかったが、この魔法があればその問題は解決する。

「駄目ね、この魔法には二つ欠点があるわ。一つは何度も姿を見られると、効力が落ちて最終的には効かなくなること。もう一つはカメラには写ってしまう事よ、そうなる魔法の効果が及ばず、完全に認識されてしまうわ。あなたが言うには、ここにはいたる所にカメラがあるらしいから」

そんなことを思いつき、アリスに言ってみたが駄目みたいだ。そしてまた、気になる事が出来たので聞いてみることにする。

「なあ、アリス。その魔法は魔力を多く使うんじゃないのか？聞いてみると、他人の五感に働きかける魔法みたいだし、ずっと発動していないといけない魔法だ」

相手に認識されにくくするのは、視覚に働きかけているからだと思う。仮説だがアリスの魔力が相手の視覚から得られる情報をずらし、意図的にアリスがいる場所に焦点を作る。細かいことは抜きで考えるとそうなる。自分の考えを伝えてみた。

「惜しいわね。確かにそんな魔法もあるのだけれど、私が使っているのは別の魔法よ、それと使っている魔力は少ないわ」

「どんな魔法なんだ？」

カバンからノートとペンを出す。これから聞く事と、さっきまでの考えを書き記すためだ。

「私が使っている魔法は一種の結界よ。それで私が持つ魔力や気配を小さく纏めているの。人間や妖怪は意識しないで出ている力を無意識に感じ取ることで、様々な事を知覚しているわ。その力を結界によって閉じ込める事によって認識されにくくするの」

メモをとる、多分、この先使わないような事ばかりだけれど、それでも自分の興味のある事柄について知識を深めるのは楽しい。

「使っている魔力が少ないのは、自分にかける魔法だからという事と、単純に結界を薄く張っているからよ」



「そんな結界で大丈夫なのか？」

自分にかける魔法と、他人にかける魔法の違いは、この前に渡された本の中に書いてあった。なんでも抵抗の違いがあるみたいだ、自分の力にとつて他の人の力は異物に等しいらしい。異物が自分に加われれば体は抵抗する、その時に相手の力を上回るために力を使うみたいだ。

「大丈夫よ。どれだけ薄い壁でも力を加えなければ、壊れないもの」

なるほど、逆に考えると力を加えればすぐに壊れるのだから、とつさの時でも困らないわけか。

「大体はわかった。最後に一つ、どうやってその結界を維持しているんだ？」

テレビで見るような結界は御札などを貼っていたが、今のアリスにはそれらしきものが見当たらない。ならばどうやっているのか気になる。

「ここにあるわ」

そうやってアリスは手の甲を見せる、そこには魔法陣が浮かび上がっていた。今までそんなものは見たことがない、アリスの話では少し前から発動していたみたいなので、俺がアリスの手を見た時に気付くはずだ。

「なんで今は見えるんだ？」

「そうね……………あなた、渡した魔道書は読み終えた？」

唐突な質問に首をかしげる、本の進行速度と何が関係あるんだ？

「後、三日ぐらいで読み終わる」

疑問を抱えながら質問に答えた。残りのページ数と今までの進行度合いを比べると、三日は掛かると思う。

「それなら次の課題は、この魔法陣の意味を読み取ること、確かカメラを持っていたわよね、それで撮影しておきなさい」

携帯を出し、アリスの手を撮る、ついでにアリスと上海を撮った。

「まあ、いいわ。意味を訳し終えたら見せに来なさい」

「分かった」

カチカチと携帯を操作しながら返事をする。パスワードを設定し終えたところで顔を上げた。

「上海」

アリスの話が終わったので上海を呼ぶ。

「さつきはゴメンな、知らなかったとは言えきつく言い過ぎた」

——フルフル

すぐ近くにいた上海に謝ると上海は気にするなと言わんばかりに頭を振った。

「ありがとう」

笑みを浮かべ上海の頭を人差し指で撫でた。

「……………」

静かになったアリスが気になり横を見てみると、先ほどよりも離れた位置で、冷たい視線を向けていた。

「な、なんだよ」

思わず言葉につまる。

「あなたってそういう趣味なの？」

言われた言葉に少しフリーズ、人差し指を上海の上に置いたまま固まった。

——?? グイツグイツ

動きの止まった俺の指に上海が頭をグリグリと押し付ける。慌てて指を動かす俺、それを見えますます冷たくなる目線、そして固まる俺。そのやりとりが何回か続き、ようやく動き出した思考で言い訳を、三十分ほど述べたところでようやく誤解が解けた。

## 五日目 朝 上海人形の変化

凄まじく眠い。ベッドの上に寝転がったまま三十分以上が経っている。アリスはもう朝ごはんを作っているだろう時間帯で、俺もいつもなら起きてリビングでテレビを見ている時間だ。もうすぐご飯ができるだろう、そのことを思い出しても起きれない、このままでは学校に遅刻してしまうだろう、と自分を追い込んでみても体は反応せず、むしろだんだんと意識が遠くなってきた。眠る直前の感覚を感じ、まずいなあと思うものの結局は睡魔に負けてしまい目を閉じた。

「まあ、いいか。おやすみ」

小さく呟いた瞬間、意識が覚醒した。勢いよく体を起こし首をかしげて自問する。  
なんで今、唐突に目覚めたんだ？

いくら頭をひねっても原因がわからない。まるでつながっていたものが、突然切れたような……。奇妙な感覚が胸の中を支配する、その感覚が何なのか意識を胸の内側に向けた時、アリスがドアを開けて入ってきた。

「あら、起きてるじゃない。ご飯、もうすぐ出来るわよ」

「ああ、分かった」

返事をするとうアリスはドアを閉め、歩いて行った。

アリスが来たことでさつきまで感じていた奇妙な感覚が消えてしまい、モヤモヤとした感覚だけが残った。

俺は何を感じていたんだろうかと思いつ返しすること数分、結局は分からずにアリスのノックの音で目が覚めたんだろと自己完結した。

「ご飯、できたわよ、早くきなさい」

考え事をしているとうアリスに呼ばれた。慌てて着替え、学校の用意を持ってリビングに行く。

「遅かったわね」

ドアを開けカバンを置いた所で声をかけられた。これは多分起きるのがという意味だろう。

「逆にアリスが早くに起きていることが不思議だよ、昨日は遅かったらど？寝るの」

「言ったでしょ、魔法使いは研究職だって。下手すれば一週間徹夜なんてこともあるくらいだよ」

話をしながら席に着く、傍から見れば打ち合せでもしてるのかと疑いたくなるであろう、同じタイミングで手を合わせた。

「いただきます」

「……………」

「……………」

食事中はいつも静かである。アリスは受け答えはしてくれるが、基本的には自分から喋らない。俺も食事中は静かに食べるのが好きなので、あまり喋りかけない。なので必然的に静かになる。だが、そんな俺たちの視線は同じ場所を向いており、見つめる先には上海が踊っていた。いつの間にか覚えたダンスをテーブルの端で踊りだしたのがさっきの事だ。始めは俺とアリスの間をフヨフヨと浮かんでいたのだが、少し目を離れた時にテーブルの端で、テレビで流れている踊りを踊り始めた。いつも見ている天気予報を見たいのだが、楽しそうに？踊っている姿を見ると、チャンネルを変えづらい。

思考を釣り糸のように垂らしながら無言で上海ダンスを見ているのも辛くなってきたので、アリスに話しかける事にする。

「なあ、アリス」

「なに？」

「微笑ましいな」

「ええ、そうね」

視線は上海に固定したままだ。

「なあ、アリス」

「……なに？」

「毎日続くのかな」

「あの子が飽きない限りね」

上海がぐるり回る。その足は宙に浮いており、今や踊っているというより舞っていた。

「なあアリス」

「………なに？」

返事までの間が長くなってきたが構わず質問を続ける。

「上海って人形だよな」

「ええ、まだ自律には至っていないはずよ」

少し前から疑問に思っていた事だ。いくらなんでも人間に近すぎないか？

「そうね、今日は上海を見てみましょうか」

自分の名前を呼ぶのが聞こえたのか、上海が首をかしげながら近寄ってきた。

「……ちそうさま」

アリスは食器を持ちテーブルを離れた、それに伴う上海も俺の食器を持って行ってくれた。まあ、食器を洗うのは俺だから、持つて行ってくれなくても良かったのだが、折角の行為に水を差すのも忍びないので、口には出さない。その代わりに感謝の気持ちを

述べようと思う。

「ありがとうな上海」

——フリフリ

アリスと一緒にリビングを出る所だった上海が振り返り、手を振るのを見てから席を立った。台所へ向かい食器を洗ってアリスたちに遅れること五分、俺もリビングを出た。

自分の部屋に着き、家を出るまでの時間を何で潰すか迷った。最近アリスの人形劇を見ているとちよūdい時間だったが、今日はしないみたいなので時間が余っている。アリスが来るまでは何をしていただろうかと思ひ、記憶を探るが思ひ出せない。それだけアリスたちが印象的なのだろう。数分ほど何をするか考えるが思ひ付かなかったので、日記を昨日教わった魔法の復習も兼ねて読んでみようと思う。

アリスは紅茶の入れ方には大分うるさかった。茶の葉の分量や湯の温度、紅茶を抽出する時間にカップへの注ぎ方など細かい部分まであれこれ言われた。ただ、アリスが言うにはこれでも基本中の基本らしい。本当は紅茶の季節や、紅茶の違いによる抽出時間の違いなど覚えることはたくさんあるみたいだ。

とりあえずアリスに教わりながら入れた紅茶は、コンビニなどで売っている紅茶には勝るが、アリスの入れた紅茶には遠く及ばなかった。そう言うアリスには年季が違う



と言われた。

そういえばアリスの年を知らないなと思いつねてみると、女性に年を聞くのは失礼な事だと、ありがたい助言を貰った。ただ、魔法使いには年齢の概念があまり無いらしい。それに疑問を持った俺が質問し、夕方にも行われた魔法講座が始まった。

それによつてアリスには捨食の魔法により、食事や睡眠などが不要な事が分かった。捨食の魔法とは食事で得られるエネルギーなどを魔力で補う魔法らしく、それを会得したときに種族が人間から魔法使いに変わるのだと教わった。

それともう一つ捨食の法というのもあるらしい。

これは魔法により成長を止めるもので、成長を止めるつまり寿命を無くす魔法である。

まあ、簡単な説明だったので詳しい事はわからない。

アリスは捨食の法を習得しているが、使用はしていないそうだ。だが、捨食の魔法を使い人間から魔法使いになったのだが、人間の時の感覚が残っており、未だに食事や睡眠をとっているみたいだ。

気になる事を聞いたり、色々な事を教わっている内に時間が経ち、気づけば午前二時になっていたので、眠ることにする。

ここまでが昨日書いた日記の内容だ。この前から毎日書いているが、自分でも何故日

記を書き出したのか分からない。何故か書かないといけないと思つてしまい、学校の帰りに日記を買い、数日前から書き続けてるのである。まあ、特に書くのが煩わしいというわけでもなく、むしろ魔法の勉強の時に見返すと、教えられた時の状況や経緯が細かく書かれていて、勉強の助けになるので書き続けることにしている。

ふと、思いついたので日記の裏表紙をめくり、最後のページに文字を書いておいた。アリスがいる限り毎日書くであろう日記に書かれた文字を見て、今更ながらに恥ずかしさがこみ上げてくる。だけどなんとなく消す気になれないので、鍵がついている机の引き出しに入れておく。机を買った時から使っていなかったので半分以上忘れていたが、今は感謝の念でいっぱいだ。アリスが勝手に入ってきて盗み見るなんてことはないと思うが、この家には上海がいるので油断は出来ない。もし上海を通してアリスが見てしまふ、なんてことになったら目も当てられない。恥ずかしさでどうにかなつてしまふだろう。鍵を自転車の鍵と同じ場所に着けポケットに入れる。これで見られる心配はなくなつた。

時計を見るとちようどいい時間なので家を出ることにする。カバンを持って、部屋を出る。今日は弁当を作っていないので、リビングには向かわずそのまま玄関に進む。俺の部屋から右にリビングがあり、左に進むと途中でアリスの部屋を横切るので、声をかけておく。

「アリスー俺は学校に行くてくるからなー」

「行つてらっしゃい」

俺の部屋とアリスの部屋の向かいにある部屋には、両親の部屋があるが今は誰も使っていないので週に何度か掃除をするだけになっている。

玄関につき靴を履く。ドアを開け少し振り返るも、そこにアリスと上海の姿は無い。少し寂しさを覚えるが、ごまかすように声を張り上げた。

「行つてきます」

## 五日目 夜 上海の変化の理由

「上海はどうだったんだ？」

俺はリビングのイスに座るなり、対面に座っているアリスに質問をぶつけた。上海は自分の名前を呼ばれたのが聞こえたのか、廊下からドアを開けてリビングに入ってきて、アリスの後ろでフヨフヨ浮いている。

「そうね。結論から言うところ……解らなかつたわ」

聞こえてきた言葉に耳を疑った。

上海はアリスが作った人形で、常に側に置き、一番大事にしている人形だ。設計図や材料、組み込んでいる魔法陣の種類や位置、掛け合わせ方までもアリスは覚えているはずである。なのに解らないという事は、どういう事だろうか？

「ただ、何かが増えてきている様な気がするのよ」

聞こえた言葉にアリスを見てみると、視線を机に固定し、何かを考えている。先ほどの言葉を思いだし、視線を上海に移すと、上海は踊っていた。目にした途端、笑いの衝動が襲ってくるが、何とか耐える。

「(っほっ)」

「どうしたの?」

手を降り、何でもないことをアピールすると、アリスは再び何かを考え出した。すこし噎せてしまったが、アリスをごまかせたのでよしとする。

気を抜けば笑い声を上げてしまいそうな喉は、息を細かく吐く事でどうか耐え、痙攣をしている横隔膜は腹筋に力を入れて、痙攣を押さえ込む。下を向いている顔を上げると、少しうずくまった俺を不思議に思ったのか、首をかしげている。

待てよ、上海は人形で今は目に見えない何かが増えているという事は……まさか!!

「ま、まあ映画か何かじゃないし、人形に霊が乗り移るなんてあるわけないよなあ?」

「いいえ、感覚的にはそういった類に近いわ」

「……………」

無言で上海から距離を取る。怖くなったんじゃない、弁当を洗うだけだ。

「まあ、これ以上、上海を調べるとなると、設備が整っていないといけないから、これが限界ね」

「んっ?全部調べてないのか?」

弁当箱を洗う手を止めずに尋ねる。何か別のことに集中していないと、震えそうになる。何故こっちに来たんだ、上海!!

顔のすぐ傍で、弁当を洗う俺の手を覗き込んでいる上海に、声を大にして問いたいのを我慢し洗いの物を続ける。

「ええ、上海の構造は複雑で、設備の整っていないこの場所じゃあ元に戻せなくなるわ」  
やっぱり上海は特別製なのだろう。アリスが上海以外の人形を、すみずみまで点検しているのは見たことあるが、上海はいつも簡単に点検するだけだった。その理由が、上海に使われている技術が凄すぎて、迂闊に手を出せなかったという理由なのだから驚きである。

「へえ、やっぱり特別なんだな上海は」

頭のすぐ傍にいる上海を見てみると、小さい体で胸を張っていた。それを見ていると、先程まで恐怖ではないが、恐怖に似たような感情を、ほんの少しだけ感じていた俺が馬鹿らしくなってきた。

謝罪の意味を込めて、未だに胸を張っている上海の頭を人差し指で撫でた。

——クルクル

顔を俯かせた上海はくすぐったそうに身をよじり俺の指から離れると、どこか嬉しそうに回りました。その愛らしさに顔がほころぶ。

「魔力のつながりが強くなっている？」

アリスが何かを言ったが、上海を愛でるのに夢中な俺は気づかなかつた。アリスが何

かを感じたように、自分の頭を触ったのにも。

晩御飯を食べ終えた俺は、自分の部屋で魔道書を読んでいたが気になる事が出来たので、アリスの部屋に向かっていった。

「アリスー聞きたいことがあるんだけど、今大丈夫か？」

ノックをしながら声をかける。そのまま数十秒ほど待つていたが、何も返答がなかった。

「おかしいな、もう寝たのか？」

もう一度ノックをしても、何の反応もなかったので、寝ているのなら仕方がない、そう思い自分の部屋へと踵を返した。

「あら、どうしたの？」

聞こえた声に振り返るとそこにはアリスがいた。水色の寝巻きが可愛いアリスがいた。風呂上がりなのか上気した顔のアリスがいた。少し寝れた髪がなんとも色っぽいアリスがいた。

思わず落しそうになった、勉強用のノートを慌てて持ち直す。そうしている間にも

アリスは自分の部屋の方、つまり俺がいる場所へ近づいてきている。

「あ、あれだ、魔道書を読んでいて、気になったことがあったから聞きに来たんだ」  
なんとか要件を伝えたが、どもってしまった。

風呂の順番は、俺が先に入りその後アリスが入る。アリスを呼ぶときは部屋の外から、少し大きめの声を出してアリスに呼びかけるだけで、その後は基本的に自分の部屋から出ない。寝る時間の少し前に、歯磨きをするために出るくらいだ。

今まで風呂に入った後のアリスに出くわす事はあるにはあったが、それも時間が経つてからだ。今みたいにアリスが上がってからすぐに合うことはなかった。

「そう、なら入りなさい」

そう言ってアリスは部屋の扉を開けて、入って行ってしまった。

「マジですかアリスさん」

小声で呟く。

アリスは、自分がどう見られているのかという事にはあまり頓着しないようだ。街中でアリスの事を綺麗だと周りの人がざわついてても、自分の事とは思わずに何食わぬ顔でスルーする光景が目に見かぶ。

まあ、俺もアリスに手を出す気は全く無い。アリスは綺麗すぎる。美術品などと同じだ。ベタベタと触ることを良しとせず、ある程度の距離から眺めているだけで満足でき



る。美しいモノを壊したくない。いつもそう思っていたら？だから緊張なんてする必要ない。

よしっ行くぞ!!

「……………」

意を決したはずの俺の体は、ドアを開け部屋に入って数歩の場所で止まってしまった。

少し湿った髪のアリスが水色の寝巻きを着て、上海を膝の上に乗せながら両手を回している状態でベッドに座っていた。

もう一度言おう。少し湿った髪のアリスが水色のn

「座らないの?..」

アリスの声で我に返る。よく見るとこの前使った椅子とテーブルがベッドのすぐ側に用意されていた。

反応の鈍い足を動かして椅子に座る。その間、目はずっとアリスの方へ向いていた。

「それで、聞きたいことは何?..」

アリスの下を訪れた理由を思い出し、意識を切り替える。ノートを開きそこに書かれたタイトルを読み上げた。

「魔力と霊力の違い、ついでに妖力と神力のことも知りたい」

再び出した声はいつもの調子に戻っていた。

「前にアリスは魔力は誰でも持つてゐるって言ったよな？」

「ええ、言ったわ」

「今日魔道書を読み進めていたら霊力という単語が出てきた。これも人間が元々持つてゐる力らしい。それらの違いが気になってここに来た」

揚力と神力についてはある程度、想像がつく。妖力はアリスが前に話してくれた妖怪が持つてゐる力の事だろう。神力は字の通り神様が持つ力の事だと思う。

まあ、本当に神様がゐるのかは判らないが、妖怪は居るみたいだし、神様もゐるのだから。

「まずは霊力と魔力の違いについて教えるわ」

アリスの声に底に沈み込んでいた意識が引つ張り上げられる。シャーペンを持ち、メモをとる用意をすることで続きを促す。

「霊力と魔力は元は同じ物で、違うのは方向性かしら」

「方向性？」

オウム返しに聞くとアリスはそうと頷き、続きを話した。

「まず前提として、神様は正の存在で妖怪は負の存在だという事を覚えていて頂戴」  
忘れないようにメモをとる。

「その中間に人間の存在があつて、人間はどちらの存在にもなることができるわ。勿論、簡単になることが出来る訳じゃないけどね」

一本の線を引く。その右端に神という文字を書き、反対側に妖怪と書く。その丁度真ん中あたりに人間と書いた所で、顔を上げるとアリスが俺のノートを見ているのに気がついた。

「そうね。その絵で言うと、妖怪が使う力が妖力で、人間と妖力の間に魔力がある感じね。霊力は魔力の反対側にあるわ」

アリスが言った事を記入し、ついでに人間と書かれた箇所の線の下に0、妖怪と神と書かれた箇所の下に—1、1とそれぞれ書いた。

「神力、霊力、魔力、妖力には使い易さというものがあるわ。神となったものには神力が、妖怪になったものには妖力を使いやすくなるの。それと、妖怪に神力はまず使えないし神様に妖力は使えないわ」

「近い力は使えるのか？例えば妖怪が魔力を使うとか、神が霊力を使うとか」「使うことはできるわ、普通はしないけれど。ちよつと見せて頂戴」

アリスがこちらに身を乗り出してきたので、慌てて体を反らす。こちらの反応を気にならないまま何かを書き足している用だ。仕方がないので、いつの間にかアリスの膝の上から居なくなっていた上海を探す。部屋を見渡すまでもなく、すぐに見つける事が出来

た。

上海はベッドのすぐ側にある、ランプが置かれている台の上に腰掛けていた。目が合うと手を振ってきたので振り返す。そういえば今日、帰ってきた時も俺の部屋の窓から振っていたなと思いだした。多分学校から帰ってくる時は毎日上にいるだろう。手を振り返す時には周りに気をつけようと思う。

視界の端に捉えていたアリスが離れたので、意識をそちらに戻す。ノートを見てみると、人間と書かれた箇所の上に、左右に向かって伸びる矢印とその先端に書かれた強という文字が書き足されていた。

……………アリスの字、逆さから書いたとは思えないほど綺麗だな。

「その絵に書いたみたいに、矢印の方向に進むに連れ強くなっていくの」

「じゃあ、なんで魔法使いは魔力を使うんだ？魔法使いだつて妖怪だろ？」

これもアリスから聞いたことだ。

「さつきも言った通り使いや易さよ。私たち魔法使いは妖怪の中では最も人間に近いの、それに昔から使われてきた魔法陣も魔力を使うことを前提としているわ」

「そうか」

今まで聞いたことをノートにまとめる。十分ほどかけてまとめ終え、夜も遅いので寝ることにする。

「ありがとう、それとおやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

簡単な挨拶を交わし、部屋を出た。明日は学校も休みなので、勉強も踏まえ盛大に夜更かしすることにした。

その後、深夜になってから何故か上海が俺の部屋に訪れ、俺の心臓を停止一歩手前まで陥れる事は完全に余談である。

## 六日目 朝 謎の夢と体の異常

「はい！あ〜ん」

「……………」

目の前で起こっている事が信じられず、何度も目を瞬かせたり擦ったりしたが、アリスが満面の笑みを浮かべて、切り分けられたケーキが乗ったフォークをこちらに向けて突き出している光景は、数秒前と変わらない姿で俺の目に写し出されていた。

「夢だろ？これ」

ほっぺたを抓ってみるも少し痛いだけで、見慣れた天井が目の前に広がる自室のベッドで跳び起きることはない。

「む〜」

あれこれ考えている内に、いつまでもケーキを食べない俺にしびれを切らしたアリスがむくれだした。

「何この子、超かわいいんだけど」

「えへへ」

思わず口にしてしまった言葉が聞こえたのか、顔を紅くさせながらもはにかむアリス

ス。

この子は俺を萌え殺す気ですか？

「たべないの？」

俺が悶えている間に落ち着いたのか、アリスが小首を傾げて聞いてきた。その姿にまた悶えそうになるがどうか堪えて口を開け、アリスの方へ体を近づける。

「あ〜ん」

アリスに食べさせてもらったケーキを味わっている俺の顔はどうしようもなく緩んでいるだろう。やっぱり小さい子供相手だと、だらしなくなってしまう。それもこれも妹がいた頃に……………うん？小さい子供？

自分の思考に疑問を持ち、あらためてアリスを見してみる。

まず、全体的に小さい。いつものアリスなら胸の少し下あたりから頭までが見えるテーブルなのだが、目の前にいるアリスはほとんど顔だけしか見えない。腕を組んで顔に乗つけるのに調度いい位置である。現に今もアリスはそうしている。可愛い。

次に顔立ちが随分と幼くなっている。少女と呼べる外見だが、どこか知的な雰囲気も漂わせており、綺麗といった言葉が当てはまるのがいつものアリスなら、ちっちゃいアリスは、少し生意気そうな子供といった所で、綺麗というよりも可愛いと言った言葉の方がしっくりくる。

まあ、ここまでくればこれが夢の中だつて事くらい俺にも分かる。だが、不思議なのは記憶に無いはずである幼い頃のアリスの姿が登場している所だ。しかも姿や服装など細かいところまではつきりとしてる。

……そういえば、テレビで聞いた事がある。夢というものは、普段意識していない所にある、抑圧された願望などが夢に出て来る事が多いらしい。そう考えると俺

は……やめよう。これ以上は精神的に悪い。そんなことよりアリスが静かだな。結構長いこと考え込んでいるが、一言も喋つてないみたいだ。

「……………」  
なんかめっちゃ見られてる。穴が開きそうなほど見られてる。

少し気になったのでアリスの方を見てみたら、ジツと俺の顔を凝視していたので少し驚いた。

「……………」  
「……………」

お互い視線をそらさないまま無言の時間が流れる。

あれ？俺の後ろを見ているのか？

「ねえ、お兄ちゃん」

「なん……………」



振り向こうとした所にまさかのお兄ちゃん呼びである。回していた首を即座に戻し、アリスの方へ顔を向ける。勢いが強すぎたのか、首から変な音が聞こえたが些細なことなので、無視する。

「なんだい？」

いつもより優しい声が出て来たような気がするが、気のせいだろう。

「上海に変な踊りを教えたのはお兄ちゃん？」

アリスが俺の後ろを指で指しているの、その方向に顔を向けた。

——シャカシャカ

踊っている上海がいた。

「まあ、アリスがいるし上海が出てきても不思議ではないか」

それにしてもいつ見ても踊っているよな、昨日なんて五、六回は見たぞそのダンス。

「聞いているの？」

少し怒ったような声を出したアリスに慌てて顔を向ける。

「いや、俺じゃ無い。上海が勝手に覚えたんだ」

「嘘よー」

いや、そんな断言されても俺は教えて無いし……そう言おうとしたが、アリスの小さな掌に集まる光を見て俺の喉は干上がった。

すんごい熱いんですけど、何この光。

「神綺様に貰った大切な人形に変な事をしたら許さないんだから!!」

「いやちやうねん」

何故か飛び出した関西弁はアリスには届かなかったのだろう。言い終えた時には俺の体は光に吞まれていたのだから。

「はっ!!」

目が覚めて最初に感じたのは汗で湿った体に走る悪寒と、鈍器で殴られた様な頭の痛みだった。

「いつてえ」

声を出してから気がついたが喉も相当渴いていた。

いや、渴いているなんてものじゃ無い。喉にナニカが張り付いている様な感覚があり、声を出すと痛みすら感じる。

酷くなる頭の痛みに思わず手を当て冷やそうとするが痛みは一向になくならず時間が経つとともに酷くなるばかりだ。

壁の方を向き横になつていた体を天井の方に向ける。視界の端に上海が見えたが、さらに注意を向ける事も出来ずにいた。あまりの痛みに、視界が蛍光灯のスイッチを点けたり消したりしているかの様に点滅している。

瀕死のポケモンつてこんな感じなのかな、なんて熱に浮かされた頭で思った。

さしずめ、俺は瀕死のコダックつてところか

そう考えるとともに俺の意識は再び沈んで行つた。

## 六日目 昼 ひらがなで三文字

闇の中を歩く少女が居た。

淡々と一定のペースで歩く少女は決して振り返らない。

俺はそれについて行く。

いや、俺では無いかもしれない。

意識はあるが、体の感覚がなく喋ることも出来ない。

まるで他人の体に移ったかのようなようだ。

少女は歩く。

粛々と前だけを見据えて。

しばらく歩いていると、ふと前方に何かが見えた。

ぼんやりとひかるそれは人の形をしたものが写っている。

それが左右に浮かんでおり、近づくとつれ詳細がはつきりとしてくる。

そこには、前を歩く少女が写っていた。

まるで、一人の少女の日常を場面ごとに切り分けて、それを絵画の展覧会みたいに見えるかのようだ。

なんとなく、この少女の思い出だと感じた。

少女が、少女の会おう人々が、街が、日常の様子が浮かんでいる。

少女が本を開いて何かを覚えようとする姿

少女が銀色の髪をした少し幼い容姿の少女と親しげに話す姿

指の先から糸を出して人形を動かしている姿

巫女服を着た少女と光の球を撃ち合う姿

様々な場面が後ろに流れていく。

俺はそれを一つ一つ眺めるが少女は見ようともしない。

まるで必要の無い物だと切り捨てるように。

それは酷く悲しい事だと思った。

やがて写真の中の少女は一人でいる時間が多くなっていた。

少女の笑顔が写真から失われていく。

それにつれ前を歩く少女の歩くスピードが速くなる。

何かを堪えるように両手を握り締め、ただ前だけを向いて歩く。

しかし、少女の歩みを邪魔するかのように大きな写真が立ちふさがった。

必然的に少女は止まる。

写真を見ると少女と銀色の髪をした少女が喧嘩をしている姿が写っていた。

それを見た少女は突然走り出した。

写真を突き破り闇の中を駆け抜ける。

何かを振り切るように

何かから逃げ出すように

少女は走る

走って、走って、走って、走って、何度か躓きながらも前へ進む。

やがて荒い息を吐きながら少女は座り込んだ。

何も無い空間に少女の呼吸の音だけが響く。

どれくらいそうしていただろうか。

少女の呼吸は落ち着き、ほんのりと上気し赤くなっていた顔色も雪のような白さに戻っている。

ただ、立ち上がらない。

ずっと座り込んだままで顔を俯かせている。

俺は何も出来ない。

そばに行つて寄り添う事も。

声をかけて支える事も。

名前を呼ぶ事さえ出来ない。

ポタポタと水滴が地面に落ちる音が響く。

顔を見ることは出来ないが少女は泣いているのだろう。

その光景を見ることしかできない自分に腹が立った。

息を吸う。

吸えているかは分からない。

腹に力を込める。

力が入っているか分からない。

ただ信じる。

絶対に出来る。

少女を見る。

悲しげな背中が見えた。

腹が立つ。

何も出来ない自分に。

涙を堪えようとする少女に。

助けを求めない少女に。

だから示そう。

俺がここにいと。

声を張り上げて、名前を呼んで、気付かせるんだ。

一人じゃ無いと。

驚かせてもいいかもしれない。

きつとびつくりして涙も引つ込むだろう。

だから声を出せ。

名前を呼ぶんだ。

親しい少女の名前を。

俺は叫ぶ。

腹に力を入れて。

喉を張り上げ。

口を大きく開けて。

名前を呼んだ。

「アリス!!!」

光が満ちた。



「いきなりなんなの？」

なんだろう、不思議な夢を見ていた気がする。

寝起きなのでぼんやりとした思考しか働かないが、酷く悲しい夢だった事を憶えてる。

内容は……………思い出せない。

思い出そうとすると頭に靄がかかったかのようになり、記憶の糸がするするとほどけていく。

ただ、悲しみと遣る瀬無さが胸の内に燻っており、どうしようもない気持ちだった。

「はあ……………くそっ」

「ため息と悪態ね、ため息を吐きたいのはこっちのほうだわ」

声が頭上から降ってきたのに驚き、体を動かそうとするが動かない。

その事に少し焦るが、声の主がアリスだった事と自分の部屋の風景が俺を落ち着かせる。

現状を把握しようとして意識を働かせた。

まず俺の体制は横向きに寝転んでいる。ベッドが目の前にあるのでベッドより下、床

に寝転んでいる事がわかる。

それと頬の下に、柔らかいものがあるのを感じた。

「なあアリス、どんな状況なんだ？」

何故膝枕をされているのか。

いつもの俺ならもつと慌てて、即座に離れるだろう。

だが、寝起きだからかぼうつとした頭と、信じられないくらいに怠い身体が、動こうとする意思を浮かぶ端から沈めて行く。

「いい、落ち着いて聞きなさいよ」

アリスはそう前置きをして、俺の身に起こった出来事を語り出した。

「——と言ったことよ」

アリスの話しを聞き、俺は唾然とする。

なんでも、朝上海に叩き起こされ渋々向かった俺の部屋で、俺が血まみれでベッドに横たわっていたらしい。

慌ててアリスは駆け寄り、どの様な状態か確かめたところ、外傷は裂傷が少しあっただけで対したことはなく、血も出血死を起こすほど、流れてはいなかったようだ。

ただ、どの様な理由かは解らないが口や鼻、それに目と耳からも血が流れていたらしい。

アリスが調べてみると、通常ではあり得ない場所に切り傷ができていたらしく、魔法で治療した所、人間ではあり得ない速度で傷が塞がったとの事だった。

「何か心当たりはない？」

「どうやら俺は寝ている間に改造人間にされたようだ」

現実逃避のための言葉は、アリスにはお気に召さなかったようだ。

こちらを見やる瞳に鋭さが混じる。

「ふざけないで」

鋭く言い放った言葉の中に、俺を心配する色が混じっているのが分かり、激しく後悔した。

「ごめん」

元々貧血気味で怠かった身体が落ち込んだ気分によってさらに重く感じる。

「心当たりは無いのね？」

再び問い掛けるアリスに対して、弱々しく頷くことしか出来なかった。

「あつ……ごめんなさい」

俺の身体の事を思い出したのか、謝るアリスに首を振って気にしなくても良いと伝え

た。

たったそれだけの動作ですら酷く体力を使い、満足に出来ない。そんな俺の頭をあやすように、労わるようにアリスが撫でる。

その気持ち良さに眼を閉じ身を委ねた。

「もう寝なさい」

その一言で、俺の意識は魔法にかかったかのように沈んでいった。

「おやすみなさい——」

名前を呼ばれた気がした。

## 六日目

## 深夜

## 眠れない夜

部屋を適度な明るさで照らす蛍光灯を見上げ、一つため息を吐いた。

なんだろうなこの状況。

壁を背にベッドに力なく座り込む俺の前には、お粥が乗ったお盆が置かれている。

治したとはいえ内臓に傷がついていた俺のためにアリスが作ってくれたものだ。

それはいい、むしろ感謝する事だ。間違っても諦観し、現実逃避気味に何かを思考する事ではない。

それなら何が俺を追い詰めているのか、パターン化してきた俺の日常、わかる人にはわかるだろう。

毎度毎度俺の羞恥心を掻き立てるイベントだ。

宙へ彷徨わせていた視線を再び前に向ける。

そこには数秒前と変わらない態勢で、俺の口元に上海がお粥を差し出している。

もう一度言おう。

上海がお粥を差し出している。

その後ろにはアリスが無言、無表情でこちらを見ており、人形のような容姿と合わせ、

どことなく不気味さを感じさせる雰囲気を漂わせていた。

が、俺にはわかつている。あれは笑いを堪えているときのアリスだ、証拠に目が笑っている。

時折、微笑ましい光景を見るように目を和らげるが、それは上海を見るときだけで、俺を見るときは面白げに目を細めている。

そんなアリスの視線に羞恥心が掻き乱され、思わず顔を逸らす。

しかし、上海にまわりこまれた!!

どうしても俺に食べさせたいらしい。

俺の動きに合わせ、常にスプーンが口元に来るように計算された動きには執念すら感じさせる。

食べるしかないのかな？

そんな諦めにも似た考えが頭を埋め尽くした。

「上海がかわいそうよ」

——うるうる

なんでだろう？

上海の眼に決して出るはずの無い涙が見えた。

それが罪悪感が見せた幻だとしても、一度認識してしまえばもうダメだ。俺には上海

が涙目でスプーンを差し出し出している様にしか見えない。

そんな上海を無視する事が出来るだろうか？ いや、出来ない。

ゆっくりと口を開ける。

今まで待たせていた分のお詫びだ。

「上海、あーん」

上海はくるくると宙を舞い、とても喜んでいる。

その反応を見る事が出来ただけで俺は満足だ。視界に堪えきれずに笑うアリスが映っというようが後悔は無い。

笑うアリスを恨みがまし……澄んだ瞳で見つめていると、上海が本来の目的を思い出したのか宙を舞うのをやめ、スプーンをしっかりと持ちこちらへ向けた。

アリスに向けていた視線を上海にしっかりと合わせ、食べさせやすいように口をさらに大きく開ける。

待つてましたと言わんばかりに前傾姿勢を取る上海。

「えっ……ちよつとまつぐふお!!」

嫌な予感を感じ止めようとしたが遅かったようだ。

制止の声は俺の脳内で響いただけで、声にならなかつたのかと勘違いしてしまうほどに迷いの無い突進だった。

凄まじい倦怠感を感じていた体が、反射により前かがみになる。幸いなことに嘔吐することは無かったが、咳と涙が止まらない。

飛び散ったお粥と何も乗っていないスプーンが歪んだ視界に映る。

しばらくの間咳き込んでいると、背中に手が添えられるのを感じた。

一定のペースで撫でる手は温かく、俺の咳も次第に落ち着いていく。

昔、似たような事があつたっけな。

いつだったか忘れたけど、泣きじやくる俺を抱きながら、母さんが背中を撫でてくれた覚えがある。

あの時俺は何で泣いていたんだっけ？

全く思い出せない。だけど、あの時母さんが俺に何度も言い聞かせていた言葉だけは思い出せた。

お前は普通だと、言い聞かせるかのように。そして何かに祈るように語りかけていて、そして俺はそれに泣きながらも頷いていた。

そんな昔の事を思い出していると、背中に感じていた温もりが唐突になくなった。

「また考え事？」

その声に伏せていた顔を上げると、何処と無く呆れている様子のアリスが居た。

「考え事する時にボーツとする癖、直した方がいいんじゃない？」



そんなにブーツとしてただるうか？

「ええ、まるでヤドンの様だったわ」

昨日映画に出ていたピンク色のあいつを思い出し、軽くへこむ。

いや、だいぶへこんだ。顔が再び下を向くくらいには。

これからは気をつけよう。本気でそう思った。

あその後、落ち込む上海を励ましながら食事を終え、ベッドの上で本を読みながら時間を潰していると、アリスが訪ねてきた。

「上海が自立に至ったわ」

「へっ？」

部屋に入るなり告げられた報告に、頭が真っ白になる。

しかし、じわじわと言葉の内容が浸透していくにつれ、俺の顔には笑みが広がっていった。

「やったなアリス！」

いつだったか、アリスが言っていた研究のテーマ、アリスの目標である自立人形が出

来た事を自分のことの様に喜ぶ。

しかし、肝心のアリスはどこか浮かない顔をしていた。

「嬉しくないのか？」

「上海が自立したのは嬉しいわ。けど……」

「けど？」

アリスは視線を下に向け、両手を組み合わせた。

元々白いアリスの指先が、さらに白くなっているその様子に少し驚いた。

「本当は私一人で成し遂げたかった」

「……………」

ポツリと呟かれたその言葉に俺は何も言えない。

きつと俺がきつかけで上海は自立したのだろう。

なら俺が何を言っても逆効果でしかなく、ただ黙ってアリスが気持ちを整理するまで

待つしかない。

「ごめんなさい」

べつに気にしなくてもいいという意図を込めて首を振る。

アリスはありがとうと小さく呟き、それをはつきりと聞き取る事が出来た俺は、今までの空気を切り変えるためにパンツと手を叩いた。

「何で上海が自立したと分かったんだ？」

「上海が自力で魔力を生みだし、私が組んだ魔法を発動させて動いているのよ」  
思った以上に自立していた。

「そうなった原因は？俺は何をしたんだ？」

「気づいてたのね」

俺が何かをしたのは判る。

さっきの眩きと、この世界に来てから上海が変わり始めた事を知っていればすぐに導ける答えだ。

だが俺が何をしたのかは自分でもわからない。

アリスには解らないのか？

「解らないわ……………ただ、今日あなたが怪我したことと関係があると思うの」

「けど、俺の怪我の事もわからなかった」

「ええ」

「じゃあ一先ずこの事は置いておこう」

「えっ？」

キョトンとするアリスが可笑しくて少し笑ってしまった。

「今は何もわからないんだろ？何で俺が怪我をしたのか、何で上海が自立したのか。」

だったらその事は一旦置いて、別のことを考えた方が建設的だろ？」

「あなたはいいの？これから先、同じ様な事が起こるかも知れないのよ？」

「そのときはそのときだ」

正直、実感が無いのだ。

体がだるくて、頭が痛い。そんなものは風邪と同じ様なものだし、血まみれで横たわっていたとしても俺はそれを知覚していない。話しを聞いたときにはすでに傷は治療されていたし、血の一滴も見当たらなかった。

そんな状態であなたは死にかけていました、と言われても実感が湧かないのは当然だ。

アリスがいなかったら、どうなっていたのかもわからない。それこそ死んでいたとしても可笑しくはないと分かっているし、心の何処かでアリスを頼りにしているのも事実だ。

それでも、考えるのをやめてアリスに任せきりにはしない。

「俺の怪我が自立のきつかけなら、上海を調べて何が起きたのか分かれば」

「あなたが怪我した原因、それに近い事柄がわかる」

そう、クロスワードと同じで分からないものをずっと考える必要はない。

その空白を埋めるのに必要なワードを周りから集めれば自ずと答えは導き出せる。

「それでだ、アリス。魔力つてのは何処で何から生み出されるんだ？」  
アリスが少し目を見開いた。

「さすがに着眼点がいいわね」

顔を伏せ、軽く握った手の人差し指、その第二関節を唇に当てる。

アリスが考え事をするときのポーズだ。

その間に俺はベッドの傍らに置いてある机から、勉強用のノートとシャープペンシルを取り出した。

今夜は長くなりそうな予感がしたからである。

そうしている内に考えがまとまったのかアリスが顔を上げた。

「あたりね」

「あたり？何が？」

「あなたの質問は的を射ているわ」

それで当たりか。

「じゃあご教授願えますか？師匠？」

「師匠はやめなさい。はあ……まず魔力に限らずある種の力はマナを媒介に魂が生み出すと言われているわ」

「まってくれ、前にアリスはマナの事を世界に備わっている魔力の事だと言ってたよ

な」

「ごめんなさい、説明の仕方が悪かったわね。マナというのは魔法使いが好んで使っている世界に漂う力の総称よ。勿論その力はこの世界、私たちが言う外の世界にもあるわ。世界には人が生み出す信仰の力、神力と畏れが生み出す妖力。その他にも色々な力が渦巻いているわ。魔力はその一部で魔法使いがマナと言うときはだいたい魔力の事を指しているの」

「今回は違つたと」

「ええ、前の説明が悪かつたわね」

「分かつた。それともう一つ質問だ。言われているっていう事は本当の事は解かつてないんだよね？」

「その通りよ。まず、魂というものは………で詳しくは解っていないのだけだど、それが上海にあれば………そもそも私はその研究をずっと続けて来たのよ………元はと言えばあの人が………あつ………こほんっ、いい？あなたの身に起こつた事はどういう訳か解らないけど………に近い事が起きた、それがなぜか上海に………」

アリスの話す内容をノートに取りながら、今日は眠れそうにないなと悟つた。

## 七日目 前編 電車、人形、時々メロス

「うそ……だろ？」

がしやんと音を立て俺の手に持っていた物が床に落ちた。

そのまま二回ほどバウンドし、俺の手の届かない所まで転がって行く。

それは奇しくも、顔を伏せこちらに表情を見せない彼女が、手の届かない所に行ってしまうのではないかと感じている、俺の心の内を表すかの様だった。

「……………」

彼女は顔を伏せたまま一步一步進めて行く。

「止まれ……止まれよ」

俺の口から出る制止の声に、一度も立ち止まることなく進むアリス。

一步一步俺に近づき、ついには俺を抜き去る、そのまま七歩ほど進んだ所で止まったが、その短い距離が決して届かない、海を挟んだ岸を連想させた。

俺は急いで落とした物を拾い、追いかける。

絶対に追いつけないと解っていても、それでも追いかけるしか無かった。

だが、先ほど連想させた海は俺の前に広がっており、あと一步でも進むと間違はなく

落ちてしまうだろう。

その海は黒く底を見ることは叶わない。時が止まっているのかと錯覚しそうになるほど海は静かで、まるで巨大な穴が空いているようだ。ともすれば崖の様にも見える。一つ間違えれば奈落の底だという点においてあなたがち間違いで無いかもしれない。眼下に満ちたどこまでも暗い闇は、地獄へと続いているのではないのか、というイメージを俺に与える。

この闇がどこまで続くかなんて入ってみないと判らない。

飛び込んでみれば案外浅く、足がつくという可能性もありえる。

しかし、そんなリスクを冒す事が出来ずに、立ちすくむ自分がひどく情けなかった。

——ポフツ

「えっ?」

いつの間にか近くに来ていた上海に肩を叩かれた。

上海にしてみれば、それは叱咤激励のつもりだったかもしれない。

けれど、この状況では逆効果なんだ上海。

突然の肩への衝撃は、最悪の結果となって俺を悲劇に陥れた。

誰でも経験したことがあるだろう。後ろから突然声をかけられ、反射的にびくつと体が動いてしまった事が。



脊髄反射により脳を介する事なく体が動く。

思考を止めず必死に打開策を考えていた俺を嘲笑うかのように、目の前に映る画面は俺が操る駒を一步進めていた。

歩みを止めた俺の目の前に、闇が口を開け牙を剥かんとする。

『ギ~~~~~ングボンビー!』

「おわた」

項垂れた俺の肩を慰めるかのように上海が叩いた。

ありがとう上海。ぬ

けれど君が原因でこうなってしまったんだよなあ。

『オレさまはラブコメとやらが嫌いだ!だから貴様には一兆円の借金を押し付けてや

る!』

「……………ごめんなさい」

今更謝ったって遅いぞアリス。

俺は激怒した。必ず、かの深謀遠慮の姫を下さなければならぬと決意した。俺には策略が判らぬ。俺は、一介の高校生である。道を歩き、学び舎に通い暮らして来た。けれども、悪意に対して十人並みに鈍感であった。六月初期俺は都市を出発し、県を越え、海を越え、何時の間にかボンビラス星へと連れて来られた。見渡す限りが紅かった。

「姫ってなんだよ」

「いきなりどうしたのよ？」

「いや、何でもない」

盛大なため息を吐き、不毛なナレーションをやめる。

アリスが怪訝そうにこちらを見ていたが、直ぐにゲームに視線を戻した。

ゲームは早くも三十年目に突入しており、アリス社長が一位を独占している。年末には日本地図が紅く染まり、ふらりと立ち寄った会社も紅一色。毎月アリス社長の名前がテレビで流れ、お金が入らない月が無いくらいだ。

全ての物事がアリス社長を中心に回っているような気がする。

バラ色のアリス社長に対して俺は、画面見渡す限りが真っ赤で所持金ですら真っ赤だ。なんで俺は、今日初めてコントローラーを握った素人の中の素人にボコボコにされているのだろうか。

これが格闘ゲームじゃなくてよかった。格闘ゲームだったら立ち直れなかっただろ

う。

こんな状況だからか、今ひとつゲームに身が入らず考え事ばかりしている。それが判断を鈍らせ、ちよつとしたミスを招き、お金とやる気が消失、という悪循環が出来ていた。

こんなやる気の無い奴とゲームをしても、楽しくはないだろうと解つていても考えることをやめられない。

昨日アリスと話した内容が頭にこびりついて離れないのだ。

曰く、俺には『程度の能力』というものが備わっている可能性があるかもしれないとの事だ。

『程度の能力』とは個人―主に神様や妖怪、ごく稀に人間―が産まれたときから持つている能力や、長い年月をかけ能力と言っても過言ではない程に昇華した技能などに名前をつけたものだ。アリスで言うところ、人形を扱う程度の能力となる。

ごく稀に後天的に能力が身につくことがあるらしいが、余程の事がなければそうはならないみたいだ。

能力の名前は自分でつけるのが普通で、自らが自信を持つ技能は勿論、産まれたときから持つ能力や後天的な能力でも、自分で何ができるのか感覚的に解り、それに困んだ名前をつける事となっている。

だが、俺にはそれがわからない。

自分が能力を持つているのかどうかすら判らず、今回の事も原因が能力にあるという可能性が高いだけで、能力が原因決まった訳じゃない。

だけど、魔力も霊力も使えない人間が魂を傷つける、ましてや分断するなど能力を使う以外に考えられない、とはアリスの言。

つまり、俺の怪我は何らかの方法——今のところ能力の可能性が高い——によって魂を分断。その魂へのダメージが繋がり深い肉体に表面化したみたいだ。

けれども、この仮説が正しいのかはわからない。

上海が魔力を生み出す、それには魂が必要で、逆説的に上海は何らかの方法で魂を得る事によって魔力を生み出した。

何故上海は魂を得たのか？

アリスの研究が身を結んだから？

それはありえない。この世界に来てからの一週間、アリスは上海をいじくってない。何もしてないのにいきなり魂を得るはずがなく、何かが起こって上海は魂を得たと推測できる。

そこで、最近起こった異常な出来事である、俺の怪我が関係しているのは明白で、原因不明だった俺の怪我に一つの仮説が浮かんだ。

能力によつて俺の魂を切り取り、それを上海に与えた。魂を与えられた上海はそれ元和上海自身の魂を作り上げた。よつて俺は怪我をしたし、上海は自律に至つた。

というのが早朝まで掛かつた議論の答えだ。

その後、テンションの上がつつていた俺の提案によりゲームをやることになつたんだが、上がつつていたテンションはどこに行つたのか、俺のやる気は底辺まで落ち込んでゐる。

「悩むのも判るけど、いい加減に進めてくれないかしら？」

「ん？」

「だから、さつさとどの道にするのか決めて、早くゲームを進めてちょうだい」

テレビへ視線を向けると、ちよつと分かれ道に差し掛かつていた。

どうやら、また考え事をして目の前のことが疎かになつていたようだ。

幸いアリスは勘違いしている様なので、そのまま誤解させておくとする。

いくらアリスと言えども、全く別の事を考えていたと知れば少し怒るかもしれない。それは嫌だ。晩御飯のおかずを一品減らされるのは地味に効くのだ。

長い時間考えていたおかげで、頭の整理が少し付いた。まだまだ考えたい事があるけれど、それは一旦置いておこう。まずは頭を切り変えて、目の前の事に全力を注ごう。

「散々考えて真つ直ぐなのね」

「俺、ここを出たらアリスに復讐するんだ」

「まだ怒ってるの?」

それには返事をせず淡々とゲームを進め、そして、ついに俺は地上へと降り立った。待っているアリス。この日を夢見てずっと守って来たカードが有るんだ。このカードでギャフンと言わせてやる。

「あら、もうこんな時間?」

「へ?」

「ご飯の支度をしないとイケないわね」

「は?」

「ゲームは終わりね」

「はい?」

アリスは淡々とコントローラーを操り、ゲームを終わらせようとする。

いきなりの展開に着いて行けず、間の抜けた俺の声が室内に響く。

これじゃまるでピエロじゃないか。

とつさにゲームの電源を切ろうとしているアリスの手首を掴んだ。

頭に浮かんだ白くて綺麗だなーとか、柔らかいなーとかの感想を無視して、しっかりとアリスの顔を見る。

「もうちよつとやらないか？」

「残念ね、もうご飯の時間だわ」

「そこをなんとか」

「考えはまとまった？」

「へ？」

唐突な質問にまたもや間抜けな声が飛び出した。

「誰かさんが散々考えていたせいで、あまり進まなかったわね」

「……………ギヤフン」

力の抜けた俺の手を解き、アリスはさっさとゲームを切ってしまった。

一度真っ暗になった画面がカラフルな色合いを取り戻した。

どうやらアリスがチャンネルを切り変えたようだ。

先程のゲームを思い出させる日本列島が映し出され、若い女の人がある横に立って、

あれこれと喋っていた。

『今年は冬の訪れが早く、明日には本格的に寒くなるでしょう』

「結局、間に合わなかったわね」

「ん？何が？」

「何って、私の搜索よ」

「アリスはここに居るじゃないか」

アリスに重い溜息を吐かれた。

「あのねえ、私がどこから来たのか忘れたの？」

わすれられた。

「いや、おぼえてるよ」

動揺を押え、視線をテレビに向けたまま答える。

「どうだか」

「いやいや本当だつて。ただ……あれだ、アリスと一緒に居るのが普通すぎて、違和感が無さすぎたと言うか……」

「……………そう」

ただ、一言だけ呟いたアリスは、そのまま台所へと姿を消した。

アリスの後を追って上海も姿を消し、部屋には俺一人が取り残される。

アリスは基本的に無表情だ。話すときも声は平坦で、そこからアリスの感情を読み取るのは難しい。

だけど、今のアリスの声は、いつもより冷たく聞こえたのは気のせいかな？



## 七日目

## 中編

## 月下美女

ゲームを終えた俺たちは、アリスの作ったご飯を卓に並べ椅子に着いていた。なんてことはない、普段の食事風景だ。だが、そこにはいつもとは違った雰囲気、妙な緊迫感が存在している。その緊迫感を醸し出しているのは、他でもない俺とアリスだ。

「……………」

「……………」

俺もアリスも互いに睨みを効かせ、牽制しあっている。

視線は常に相手の目から逸らさず、視界の端でおろおろしている上海には目もくれない。上半身をやや前に傾け、右の握りこぶしを腰だめに構え、その手を左手で覆っている。

まるで示し合わせたかのように、俺とアリスは同じポーズを取っていた、どうやらアリスも俺と同じ事を考えているようだ。

なら、やることは一つ。己の欲望を満たさんが為に、目の前に鎮座する物を奪い合おうじゃないか。

「最っ初はグー！じゃんけんポン!!」

この食卓に着いてから始めてアリスから目線を外す。恐る恐る互いに出した手を見ていると、アリスはグーで俺がチョコキだった。

「ば……バカな」

「私の勝ちね」

アリスが嬉しそうな顔で、と言っても、口角をほんの少し上げたただだが、目の前のポトルを手取る。

俺にはその光景を、羨望とともに見つめることしか出来ない。争いに負けた惨めな敗北者は、指を加えて待っているしかないのだ。

そう、出来たてのトンカツに、ソースがかけられる瞬間を。

「残念、やっぱりソースは無くなったわ」

空になったポトルを傾けるアリス。

分かっていたことだ、ソースが一人分すら無い状態だったことは、その少ないソースを賭けて争ったのだから。

ソースが無いトンカツなんて、俺には耐えられない。

と、言うわけで。

「ちよつとソース作ってくる」

「ソースって作れるの？」

「まあ、似たような種類のソースがいくつもあるから、だいたいのソースは作れるな」  
たこ焼きにお好み焼き、ウスターや串カツ、それとケチャップ。これだけの種類があればトンカツソースは作れる。

「というか、一般家庭に置いてある調味料を駆使すれば、だいたいのものは作ることが可能だ。」

「まあ、これだけの種類があるのは、現代の技術があるからで、それが無い幻想郷では………どうしているんだ？聞いてみよう。」

「幻想郷じゃあ、食料とか調味料はどうしているんだ？」

「視線を少し上に向け、頬に指を当てるアリス。」

「人里で売っている物を買うか、山菜なんかを自分で摘んだりしているわ。人里には色んな店があるの、大体の店が一つの物を専門的に取り扱っているから、調味料や食べ物はどういった店で買わないと駄目ね」

「へー、けど大体の物は手に入るんだな」

「となると、人里の規模は思ってたよりも大きいみたいだな。」

「そうね、ただ幻想郷には海がないから、塩とか海の魚なんかは値段が高いわね」  
「海がないのにどうやって塩を取ってるんだ？」

「たしか、塩は昔から海の水を利用して作っていたはずだ。」

「私も詳しくは知らないわ。店の人に聞いた話だと、幻想郷には川の水が塩水になる日が定期的にあつて、その水を利用して塩を作っているそうよ」

「潮汐か」

ということとは、幻想郷は川の水が潮汐によつて海水に変わり、尚且つ塩作りが盛んな地域の近くにある可能性が出てきた。

まあ、それだけの情報じゃあ、検索しても数が多すぎて絞り込めないだろうけど、何かの手がかりになるかもしれないので、アリスにも伝えよう。

「そう……一応後で調べてみるわ、ありがとう」

多分アリスの部屋にある、ノートパソコンで調べるのだろう。アリスが毎日家のノートパソコンを使っていたので、アリスの部屋に置いて置くようになった。

「そういうえば、アリスって毎日パソコンで何をしているんだ？」

「この世界の事を調べているわ。特に興味深いのが科学というものね。他にも歴史や法律、常識なんかも調べる事が多いわね」

「それ、面白いのか？」

話を聞く限り、面白そうには思えない。まるで学校みたいじゃないか。  
「ちょうど、貴方が魔法の事を勉強するのと同じね」

うっ、そう言われるとそうだけだ。

「いや、まあ、科学の事はそうだろうけど、法律なんかは面白いとは思えないんだけど……」

「そう？面白いわよ。じゃあ、幻想郷にも法律のようなルールがあるは話したわね。その中には幻想郷特有のものもあるわ」

そこからアリスの長い話が始まった。

「人里には危害を加えてはいけなと言ったけれど、それは何も直接的な暴力に限った事ではないの。人里は微妙なバランスで均衡が取れ、経済や物流が成り立っているの。それを壊すような事も禁止されているわ」

とか

「これは最近できたルールなんだけど、博麗の巫女が提唱したスペルカードルールというものがあるの。まあ、あまり流行ってないようだけど……これは霊力や魔力を弾幕のように展開し、その美しさを競うもので、人間と妖怪との新しい関係の構築のためのものらしいわ」

など

最終的には俺からも話を振り、今日も夜遅くまで話すのであった。

月明かりが照らす夜の道、電灯が壊れており、どことなく不気味な雰囲気漂わせるため、夜の間は全く人が通らないはずのその場所で、俺は一人の人物と対面していた。

月と同じ色をした輝くような金色の髪に、深海のような深みが、叡智を極めた賢人をおぼわす双眸、神話の女神が目の前にいると錯覚するような美しい姿。だが、その手に持つ日傘によってできる影が、女性の雰囲気をあやふやなものへと変えていた。

「こんばんわ」

「……………こんばんわ」

美しい笑み、まるで闇を照らす月のような笑み——ただ、夜空の月に見惚れて居る間に、足下から飲み込まれるような錯覚を覚える——に見つめられること数分、いや、数十秒か？時間さえ曖昧になる奇妙な緊張感の中、突然の挨拶に、焦りながらも冷静さを装い、こちらにも挨拶を交わした。

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。

美しい女性は妖しい笑みを湛えながら、竹むばかりで言葉を放とうとする気配が無い。時折、いたずらに吹く風が、長い金髪をさらさらと宙に泳がせる。

対する俺は背中に冷や汗をかき、言葉を放とうとするも、口を糸で縫い付けられたように開くことが出来ない。本当に縫い付けられているわけではない。だが、口を開こうとする俺の意思とは裏腹に身体が、本能が、俺の動きを遮る。

要するに俺は目の前の女性を全力で警戒していた。

一本の線を幻視する。俺と女性の間横たわる線だ。

きつと、その線は境界線なのだろう。俺が住む世界と、目の前にいる女性の、妖怪の、魔法使いの、そして、アリスが住んでいる世界とのボーダーライン。

それを越えれば、もう戻って来れない。

アリスのように様々な偶然が重なるなんて、そんな都合のいい事は起きないだろう。幻想郷に行けば、こちらの世界には二度とは戻って来れないだろう。それはつまり父さんと母さんを置き去りにするという事だ。それは出来ない。妹に続いて、俺までいなくなったらあの二人は立ち直れないだろう。

だけど、それでも俺は幻想郷に行ってみたい。

この退屈な毎日に見切りをつけて、未知なる世界へと踏み込んでみたい。そんな想いが、抑えても抑えても溢れ出てくる。

そんな葛藤を抑えている俺を尻目に、女性は何かに見切りをつけたように歩き去ろう

としていた。

「ま、待ってくれ！」

目の前に転がっているチャンスを逃したくない、ここで少しでも関わっていれば、またチャンスが訪れるのでは無いか？その考えに至ったときには、俺は警戒心も忘れ、女性に声をかけていた。

俺の声にゆっくりと振り返る女性、その姿を照らしていた月の光が陰りを見せる。頼りなくも闇を照らす月の光は日傘に遮られ、女性の顔に影を落とす。その中でもはつきりと輝く金色の瞳に見つめられ、声が出せなくなった。

というか、勢いだけで声を掛けたので、何を話せばいいのかわからなかった。

刻一刻と過ぎ去る時間。

俺は焦りながらも、何か話題は無いのかと普段はあまり使わない脳を必死に動かす。だが、普段から他人に縁のない俺には、コミュニケーション能力が足りなかった。

ごめんなさい。こういう時、どんな話したらいいのかわからないの。

思わずネタに走ったそのとき、脳内に浮かぶ女の子を、月明かりが照らしたように、俺の暗雲としたこの状況にも一筋の光が差した。

空を見上げれば、先ほど雲に隠れた満月が顔を出していた。それを数秒ほど見つめてから、女性の顔を真面目な顔を作って見つめる。



「……月が………綺麗ですね」

めちやくちや笑われた。

いつの間にか持っていた扇子を広げ、口元を隠しているが小刻みに振動する日傘と、抑え切れていない笑い声が、俺の羞恥心をこれでもかという程痛めつける。

もう一度空を見上げ、夜空に輝く月を見る。

どうしてだろうか、先ほどまで綺麗だった満月が、今では少し滲んで見える。

「なんでさ」

俺の小さな眩きは夜空に溶けるように消えていった。